

---

日本ロシア文学会  
第 67 回大会資料集

---

2017 年 10 月 14 日（土）～15 日（日）  
上智大学 四谷キャンパス

日本ロシア文学会

第 67 回 (2017 年度) 定例総会・研究発表会は、来たる 10 月 14 日 (土)、15 日 (日) の両日、上智大学・四谷キャンパスにて開催されます。研究発表会では、38 件の個別発表 (A, B, C)、3 件の企画パネル (P)、併せて全 19 ブロックが設けられます。ふるってご参加ください。

以下の日程をご確認の上、事務局・大会実行委員会からの問合せメールに対し、10 月 4 日 (水) までに参加予定をご返信くださるようお願いいたします (返信先: exe\_conf@yaar.jp.org)。

| 10 月 14 日 (土)                               |             |                                 |             |                                |             |                                |             |                                |             |
|---|-------------|---------------------------------|-------------|--------------------------------|-------------|--------------------------------|-------------|--------------------------------|-------------|
| 開会式 09:15-09:25 6 号館 (ソフィアタワー) 2 階 6-202 教室 |             |                                 |             |                                |             |                                |             |                                |             |
|   |             | 第 1 会場<br>6 号館 2 階<br>6-202 教室  |             | 第 2 会場<br>6 号館 3 階<br>6-306 教室 |             | 第 3 会場<br>6 号館 3 階<br>6-305 教室 |             | 第 4 会場<br>6 号館 3 階<br>6-303 教室 |             |
| 研究発表  | 09:30-10:05 | A01                             | ブ ロ ッ       |                                |             | C01                            | ブ ロ ッ       | C03                            | ブ ロ ッ       |
|   | 10:05-10:40 | A02                             | ク①          |                                |             | C02                            | ク②          | C04                            | ク③          |
|   | 10:40-10:45 | 休憩                              |             |                                |             |                                |             |                                |             |
|   | 10:45-11:20 | A03                             | ブ ロ ッ<br>ク④ | B01                            | ブ ロ ッ<br>ク⑤ | C05                            | ブ ロ ッ<br>ク⑥ | A06                            | ブ ロ ッ<br>ク⑦ |
|   | 11:20-11:55 | A04                             |             | B02                            |             | C06                            |             | A07                            |             |
|   | 11:55-12:30 | A05                             |             | B03                            |             | C07                            |             |                                |             |
| 昼食・理事会                                      | 12:30-13:30 | 理事会 6 号館 (ソフィアタワー) 2 階 6-202 教室 |             |                                |             |                                |             |                                |             |
| 研究発表・パネル                                    | 13:30-14:05 | A08                             | ブ ロ ッ<br>ク⑧ | P01                            | ブ ロ ッ<br>ク⑨ | C08                            | ブ ロ ッ<br>ク⑩ | A11                            | ブ ロ ッ<br>ク⑪ |
|   | 14:05-14:40 | A09                             |             | C09                            |             | A12                            |             |                                |             |
|   | 14:40-15:15 | A10                             |             | C10                            |             |                                |             |                                |             |
| 大賞受賞記念講演                                    | 15:20-16:20 | 6 号館 (ソフィアタワー) 3 階 6-304 教室     |             |                                |             |                                |             |                                |             |
| 定例総会・<br>会長選挙                               | 16:30-18:10 | 6 号館 (ソフィアタワー) 3 階 6-304 教室     |             |                                |             |                                |             |                                |             |
| 懇親会   | 18:30-20:30 | 2 号館 5 階 学生食堂                   |             |                                |             |                                |             |                                |             |

| 10 月 15 日 (日) |             |                                |             |                                |             |                                |             |  |  |
|---------------|-------------|--------------------------------|-------------|--------------------------------|-------------|--------------------------------|-------------|--|--|
|               |             | 第 1 会場<br>6 号館 2 階<br>6-202 教室 |             | 第 2 会場<br>6 号館 3 階<br>6-306 教室 |             | 第 3 会場<br>6 号館 3 階<br>6-305 教室 |             |  |  |
| 研究発表          | 09:30-10:05 | A13                            | ブ ロ ッ       | B04                            | ブ ロ ッ       | A15                            | ブ ロ ッ       |  |  |
|               | 10:05-10:40 | A14                            | ク⑫          | B05                            | ク⑬          | C11                            | ク⑭          |  |  |
|               | 10:40-10:45 | 休憩                             |             |                                |             |                                |             |  |  |
|               | 10:45-11:20 | A16                            | ブ ロ ッ<br>ク⑮ | B06                            | ブ ロ ッ<br>ク⑯ |                                | ブ ロ ッ<br>ク⑰ |  |  |
|               | 11:20-11:55 | A17                            |             | B07                            |             | C12                            |             |  |  |
|               | 11:55-12:30 |                                |             | B08                            |             | C13                            |             |  |  |
| 昼食            | 12:30-13:30 | 昼食                             |             |                                |             |                                |             |  |  |
| 研究発表・パネル      | 13:30-14:05 |                                |             | P02                            | ブ ロ ッ<br>ク⑱ | P03                            | ブ ロ ッ<br>ク⑲ |  |  |
|               | 14:05-14:40 |                                |             |                                |             |                                |             |  |  |
|               | 14:40-15:15 |                                |             |                                |             |                                |             |  |  |

#### 会場案内

- 〈受付〉 6 号館 (ソフィアタワー) 2 階教室ロビー
- 〈控室〉 6 号館 (ソフィアタワー) 2 階 6-203 教室
- 〈書籍等販売〉 6 号館 (ソフィアタワー) 2 階 6-204 教室

プレシンポジウム

二葉亭四迷再考 —— 人物、文体、可能性

Пересмотр Фтабатэя Симэя: личность, стиль, возможности

日時：10 月 13 日（金）18 時～20 時

場所：上智大学 中央図書館 L-921

二葉亭四迷（1864－1909 年）は多様な顔を持っていた。ツルゲーネフの『あひびき』などロシア文学の日本初の本格的な翻訳者、その訳業を通じて言文一致体を編み出した先駆者、『浮雲』などで「個」の問題を前景化した近代日本文学最初期の作家、日本とロシアの地政学的葛藤を予見し、憂慮した国士——等々。

それらはいずれも、日本に近代という機構が成立する過程で現れていた諸々の課題を、二葉亭がわが身に真摯に引き受ける中から生じてきたものである。しきりに「近代の終わり」が語られている今こそ、私たちは立ち止まって、この多面的な人物の魅力と現代における意味をもう一度振り返ってみる必要があるのではないか。

これまでロシア文学・比較文学・日本文学の立場からこの作家に言及を重ねてきた方々とともに、二葉亭という人物あるいは現象について考えてみたい。

司会：源貴志（早稲田大学）

報告者：

安井亮平（早稲田大学名誉教授）：ロシアに係わる者にとって、二葉亭とは

二葉亭は、日本でロシアに係わる人が、専門分野に関係なく、等しく直面する問題の原型を示す存在である。あるいは、今日なおそのたどるべき定めを指し示しているとさえ思う。少なくとも私にとって、二葉亭はそのような存在である。何かロシアに係わる問題にぶつかると、いつも、二葉亭ならどう考えるだろうか、どう対処するだろうか、私は思い巡らすことにしてきた。私にとって二葉亭四迷がどのような存在であり続けてきたかをお話する。

初内裕子（早稲田大学）：「二葉亭らしさ」について

二葉亭の翻訳には、訳し方の根拠が判然としない表現や文章が時として顔を出す。それらは二葉亭の翻訳作品の多くに共通して見られる特徴であり、原文の正確な訳出より自身が好む語彙を優先させた結果であることに気付く。いわば翻訳癖のようなものであり、「いかにも二葉亭」と読者に感じさせる一因ともなっている。本報告では二葉亭の翻訳癖が顕著に表れる数字の訳し方や登場人物の口調などを例に挙げ、「二葉亭らしさ」の正体にせまる。

安藤宏（東京大学）「近代言文一致体の成立と二葉亭四迷」

すでにこれまで論じ尽くされてきた感もあるが、あらためて『あひびき』が近代小説に及ぼした影響について考えてみたい。私見によれば、近代小説の言文一致は、文末詞「～た」の定着と大きく関わっているものと考えられる。その際、『あひびき』が大きな役割を果たしたのは周知の事実だが、平行して書かれていた『浮雲』に与えた影響と、同時にこの文末詞を使いこなすことが困難であった状況について、表現史的な展開を視野において考えてみたいと思う。

ヨコタ村上孝之（大阪大学）「二葉亭四迷のポリグロティズム—国語・国民文学の解体に向けて」

二葉亭四迷はバイリンガル文学者という印象が強いが、英語・ドイツ語など複数の言語に精通したポリグロットであった。彼の文学・思想にとってそのことの意味は少なくない。近年、「エクソフォニー」ということが言われ、バイリンガルな文学が注目されているが、バイリンガリズムはネーションの装置としての言語を再構築する危険をはらんでいる。本発表は二葉亭の多言語性を再評価することを通じて、ポリグロティズムを介した国語・国民文学の解体の可能性を探る。

主催 日本ロシア文学会

協力 科研費基盤（B）「近代ロシア文化の“自叙”の研究」（課題番号 26284044）

第 1 日研究発表 10 月 14 日 (土) 四谷キャンパス 6 号館 (ソフィアタワー)

| 第 1 会場 6 号館 2 階 6-202 教室          |     |  |   |               |
|-----------------------------------|-----|--|---|---------------|
| ブロック・日時                           | 番号  | 発表者  | 題 目   | 司会者           |
| ブロック①<br>10 月 14 日<br>09:30-10:40 | A01 | 杉野ゆり<br>СУГИНО Юри   | プーシキン『青銅の騎士』と『漁師と魚の話』: 自伝的要素の問題に寄せて<br>Поэма «Медный всадник» и «Сказка о рыбаке и рыбке»<br>А.С. Пушкина: к проблеме автобиографических элементов              | 郡伸哉<br>三好俊介   |
|                                   | A02 | 山下大吾<br>ЯМАСИТА<br>Даиго   | プーシキンの抒情詩「…再び私は訪れた」の一解釈<br>К интерпретации стихотворения Пушкина «...Вновь я посетил»   |               |
| ブロック④<br>10 月 14 日<br>10:45-12:30 | A03 | 北井聡子<br>КИТАИ Сагоко   | ファルスを持つ女-グラトコフ『セメント』のヒロイン・ダーシャについて<br>Женщина с фаллосом: Образ Даши в романе Гладкова «Цемент»   | 佐藤千登勢<br>長谷川章 |
|                                   | A04 | 古川哲<br>FURUKAWA<br>Akira   | プラトーフ『手回しオルガン』におけるト書きの役割: 登場人物の移動に注目しつつ<br>Функция ремарок в пьесе Андрея Платонова «Шарманка» с точки зрения описания движений главных героев                  |               |
|                                   | A05 | 佐藤貴之<br>САТО Такаюки   | 革命後のロシア文学における「家」の表象<br>К вопросу об образе «дома» в русской литературе после Октябрьской революции  |               |
| ブロック⑧<br>10 月 14 日<br>13:30-15:15 | A08 | 泊野竜一<br>ТОМАРИНО<br>Рёйти  | 『貧しき人々』における対話表現の問題<br>Проблемы литературного приема выражения диалога в романе Ф.М. Достоевского «Бедные люди»  | 松本賢信<br>望月哲男  |
|                                   | A09 | 上西恵子<br>УЭНИСИ Кэйко   | 『罪と罰』における新しいエルサレム、神、ラザロの復活<br>Новый Иерусалим, Бог и воскресение Лазаря в романе Ф. М. Достоевского «Преступление и наказание»                                  |               |
|                                   | A10 | 樋口稲子<br>ХИГУТИ Инэко   | ドストエフスキーの創作における特殊性<br>О характерных особенностях творчества Достоевского  |               |
| 第 2 会場 6 号館 3 階 6-306 教室          |     |  |   |               |
| ブロック・日時                           | 番号  | 発表者  | 題 目   | 司会者           |
| ブロック⑤<br>10 月 14 日<br>10:45-12:30 | B01 | 光井明日香<br>МИЦУИ Асука   | ロシア語における男性・女性のペアを成す人間を表す名詞をめぐって<br>О существительных, которые называют людей и имеют родовые пары в русском языке   | 黒岩幸子<br>小林潔   |
|                                   | B02 | 金子百合子<br>KANÉKO Юрико  | ロシア語と日本語における「動作の限界」の語彙(語形成)的表現・文法的表現<br>Лексические (словообразовательные) и грамматические способы выражения идеи ПРЕДЕЛА ДЕЙСТВИЯ в русском и японском языках |               |
|                                   | B03 | ЛАТЬШЕВА<br>Светлана<br>Игоревна   | Stихотворения как дидактический материал для постановки произношения и интонации у японских студентов   |               |
| ブロック⑨<br>10 月 14 日<br>13:30-15:15 | P01 | ロシア・フォークロアの現在<br>熊野谷葉子、藤原潤子、柚木かおり<br>Русский фольклор сегодня<br>КУМАНОВА Ёко、ФУДЗИВАРА Дзюнко、ЮНОКИ Каори | 伊東一郎<br>ИТО Итиро   |               |

| 第 3 会場 6 号館 3 階 6-305 教室       |     |                                |   |               |
|--------------------------------|-----|--------------------------------|---|---------------|
| ブロック・日時                        | 番号  | 発表者                            | 題 目   | 司会者           |
| ブロック②<br>10月14日<br>09:30-10:40 | C01 | 宮崎衣澄<br>МИЯДЗАКИ<br>Идзуми     | 大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスをめぐって<br>Иконостас в соборе Покрова Пресвятой Богородицы в Осака  | 藤原潤子<br>三浦清美  |
|                                | C02 | 渡辺圭<br>БАТАНАБЭ Кэй            | 現代ロシア正教会の靈的文獻<br>Духовные литературы современной Русской Православной Церкви.   |               |
| ブロック⑥<br>10月14日<br>10:45-12:30 | C05 | 三浦領哉<br>МИУРА Рэйя             | В.Ф. Одо-Ефускее 『ロシアの夜』と音楽思想<br>«Русские ночи» В. Ф. Одоевского и его мысль о музыке   | 高橋健一郎<br>村田真一 |
|                                | C06 | 一柳富美子<br>ХИТОЦУЯНАГИ<br>Фумико | 知られざるチャイコフスキイ：日記の未紹介ページから<br>Неизвестный Чайковский: из необнаруженных листов дневников   |               |
|                                | C07 | 神竹喜重子<br>КАМИТАКЭ<br>キエコ       | 19世紀末から20世紀初期のロシアにおける芸術メセナ<br>——古儀式派の資本家と私立歌劇場<br>Меценатство в России с конца XIX века до начала XX века: старообрядческие предприниматели и их частные оперные театры   |               |
| ブロック⑩<br>10月14日<br>13:30-15:15 | C08 | 江村公<br>EMURA Kimi              | メディエーターとしてのニコライ・プーニン—十月革命後の芸術組織再編の中で<br>Nikolai Punin as Mediator — In the midst of Reformation of Art Institutions after the October Revolution  | 楯岡求美<br>本田晃子  |
|                                | C09 | 伊藤愉<br>ИТО Масару              | ロシア国立芸術史研究所の活動と1920年代演劇<br>О действии ГИИИ (Государственного Института Истории Искусств) и театральном искусстве 1920-х годов   |               |
|                                | C10 | 鈴木佑也<br>СУДЗУКИ Юя             | ソ連建築界と近代主義建築における都市像の軌み：第四回近代主義建築国際会議（CIAM）モスクワ開催の頓挫理由究明に向けて<br>Расхождение во взглядах на концепцию города между модернистской архитектурой и советским архитектурным сообществом: анализ причин неосуществления 4-й конференции Международного конгресса современной архитектуры (CIAM) в Москве |               |

| 第 4 会場 6 号館 3 階 6-303 教室       |     |                                     |  |              |
|--------------------------------|-----|-------------------------------------|--|--------------|
| ブロック・日時                        | 番号  | 発表者                                 | 題 目  | 司会者          |
| ブロック③<br>10月14日<br>09:30-10:40 | C03 | БОБОРЫКИНА<br>Татьяна Александровна | В поиске визуальной метафоры: Достоевский на языке балета и кино   | 岩本和久<br>武田昭文 |
|                                | C04 | БЛИНОВ<br>Евгений Николаевич        | Виктор Виноградов об историчности «национализма» Пушкина в контексте новой культурной политики тридцатых годов |              |
| ブロック⑦<br>10月14日<br>10:45-11:55 | A06 | КОЛЕСНИКОВА<br>Елена Ивановна       | Александр Блок и медиасреда начала XX в. (по архивным материалам Пушкинского Дома РАН)                         | 鴻野わか菜<br>越野剛 |
|                                | A07 | КОВТУН<br>Наталья Вадимовна         | Современный русский традиционализм: идеология, эстетика, перспективы   |              |

|                                |     |                                 |  |              |
|--------------------------------|-----|---------------------------------|--|--------------|
| ブロック⑪<br>10月14日<br>13:30-14:40 | A11 | ОРЕХОВ<br>Борис Валерьевич      | Метрические ошибки В.А. Жуковского в переводе<br>«Одиссеи» | 奈倉有里<br>前田和泉 |
|                                | A12 | ФЕДОСЕЕВА<br>Татьяна Васильевна | Онтология личности в лирике Я.П. Полонского                |              |

第 4 回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10月14日(土) 15:20-16:20 6号館(ソフィアタワー)3階 6-304教室

| 受賞講演者                 | 講演題目   |
|-----------------------|--|
| 桑野隆<br>KUWANO Takashi | 「20世紀ロシアの人文知の魅力」<br>The Attractiveness of Russian Humanities of the 20th Century |

第 2 日研究発表 10月15日(日) 四谷キャンパス 6号館(ソフィアタワー)

第 1 会場 6号館 2階 6-202教室

| ブロック・日時                        | 番号  | 発表者                        | 題目  | 司会者          |
|--------------------------------|-----|----------------------------|---|--------------|
| ブロック⑫<br>10月15日<br>09:30-10:40 | A13 | 山路明日太<br>ЯМАДЗИ<br>Асута   | レールモントフ『預言者』をめぐる一考察<br>К стихотворению М.Ю. Лермонтова «Пророк»   | 大西郁夫<br>乗松亨平 |
|                                | A14 | 大野斉子<br>ОНО Токико         | ソログープの作品における香りの表現<br>Выражение аромата в произведениях Федора Сологуба  |              |
| ブロック⑬<br>10月15日<br>10:45-11:55 | A16 | 平松潤奈<br>ХИРАМАЦУ<br>Дзюнна | ドストエフスキーにおける貨幣<br>Деньги в творчестве Достоевского  | 番場俊<br>宮川絹代  |
|                                | A17 | 塚田力<br>ЦУКАДА<br>Цутому    | 『1890年チェーホフによるサハリン住民調査資料』における<br>古儀式派住民と、チェーホフにおける古儀式派のイメージ<br>Старообрядцы в «Материалах сахалинской переписи А.П.<br>Чехова. 1890 год» и образы старообрядцев у А.П. Чехова |              |

第 2 会場 6号館 3階 6-306教室

| ブロック・日時                        | 番号  | 発表者                       | 題目  | 司会者          |
|--------------------------------|-----|---------------------------|---|--------------|
| ブロック⑭<br>10月15日<br>09:30-10:40 | B04 | 丸山由紀子<br>МАРУЯМА<br>Юкико | パホーミイ・セルブ(ロゴフェート)直筆写本における言語<br>的特徴に関して—『ラドネシのセルギイ伝』を資料として—<br>Языковые особенности в автографе Пахомия Серба<br>(Логофета) – на материале «Жития Сергия Радонежского» –   | 中澤敦夫<br>三谷恵子 |
|                                | B05 | 青山忠申<br>АОЯМА<br>Таданобу | 『アヴァクム自伝』におけるアクセント選択とその文体的役<br>割について<br>Акцентовки и их стилистические функции в «Житии<br>протопопа Аввакума»  |              |
| ブロック⑮<br>10月15日<br>10:45-12:30 | B06 | 渡部直也<br>ВАТАБЭ Наоя       | 語の活用における出母母音の交替の回避<br>Отсутствие чередования беглых гласных в парадигме   | 浦井康男<br>堤正典  |
|                                | B07 | 中野悠希<br>НАКАНО<br>Юки     | ロシア語における y+生格と状況語中の свой との照応条件<br>について<br>Условия употребления возвратного притяжательного<br>местоимения «свой», стоящего в обстоятельстве и имеющего<br>своим antecedентом предложно-падежную форму «y+род.» |              |
|                                | B08 | 東出朋<br>ХИГАСИДЭ<br>Томо   | ロシア語の呼びかけ語のポライトネス的用法<br>Анализ употребления обращений в русском языке с точки<br>зрения «Вежливости» П.Брауна и С.Левинстона  |              |

| ブロック⑱<br>10月23日<br>13:30-15:15  | P02 | Между источниками и списками: текстологические исследования средневековой славянской письменности<br>МОЛДОВАН Александр, ХАТТОРИ Фумиаки, МИТАНИ Кэйко |  | MITANI<br>Кэйко |
|---------------------------------|-----|--|--|-----------------|
| <b>第 3 会場 6 号館 3 階 6-305 教室</b> |     |  |  |                 |
| ブロック・日時                         | 番号  | 発表者  | 題 目  | 司会者             |
| ブロック⑭<br>10月15日<br>09:30-10:40  | A15 | 南平かおり<br>НАМПЭЙ<br>Каори   | 1950年代の日本児童文学界におけるロシア翻訳児童文学—ノーソフ作福井研介訳『ヴィーチャと学校友だち』を中心に—<br>К вопросу о переводе произведений русской детской литературы в японском детском литературном мире 1950-х годов | 熊野谷葉子<br>毛利公美   |
|                                 | C11 | 恩田義徳<br>ОНДА<br>Ёсинори  | 聖アトス山ゾグラフィオス修道院文書庫の露和辞典について<br>Русско-японский словарь в архиве монастыря Зограф на Святой Горе Афон   |                 |
| ブロック⑰<br>10月15日<br>11:20-12:30  | C12 | 林由貴<br>ХАЯСИ Юки   | 在外ロシア思想における経験の概念（ゲッセンとグールヴィチ）<br>Концепция переживания в философии русского зарубежья (С. И. Гессен и Г.Д. Гурвич)   | 貝澤哉<br>佐藤正則     |
|                                 | C13 | 前田しほ<br>MAEDA<br>Shiho   | 旧ソ連の記念碑における寓意的な女性像：ロシア・南コーカサス・ウクライナの現状と比較考察<br>About Allegorical Female Image in the Former Soviet Monuments: Comparative Research on Russia, Ukraine and South Caucasus   |                 |
| ブロック⑲<br>10月15日<br>13:30-15:15  | P03 | Революционный импульс: искусство, наука, идеология<br>КОВТУН Наталья (Комментатор)<br>НОНАКА Сусуму, ГРЕЧКО Валерий, КИМ СуКван                        |  | КОМИЯ<br>Митико |

### 会場校からのお知らせ

#### 【大会実行委員会へのお問い合わせ】

上智大学外国語学部ロシア語学科 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1  
 (井上幸義研究室) 電話 03-3238-3754 E-mail: ino-yu@gw5.u-netsurf.ne.jp  
 (村田真一研究室) 電話 03-3238-3975 E-mail: luna\_gatto@m5.dion.ne.jp  
 (秋山真一研究室) 電話 03-3238-3979 E-mail: akiyamas@sophia.ac.jp

#### 【宿泊・昼食その他】

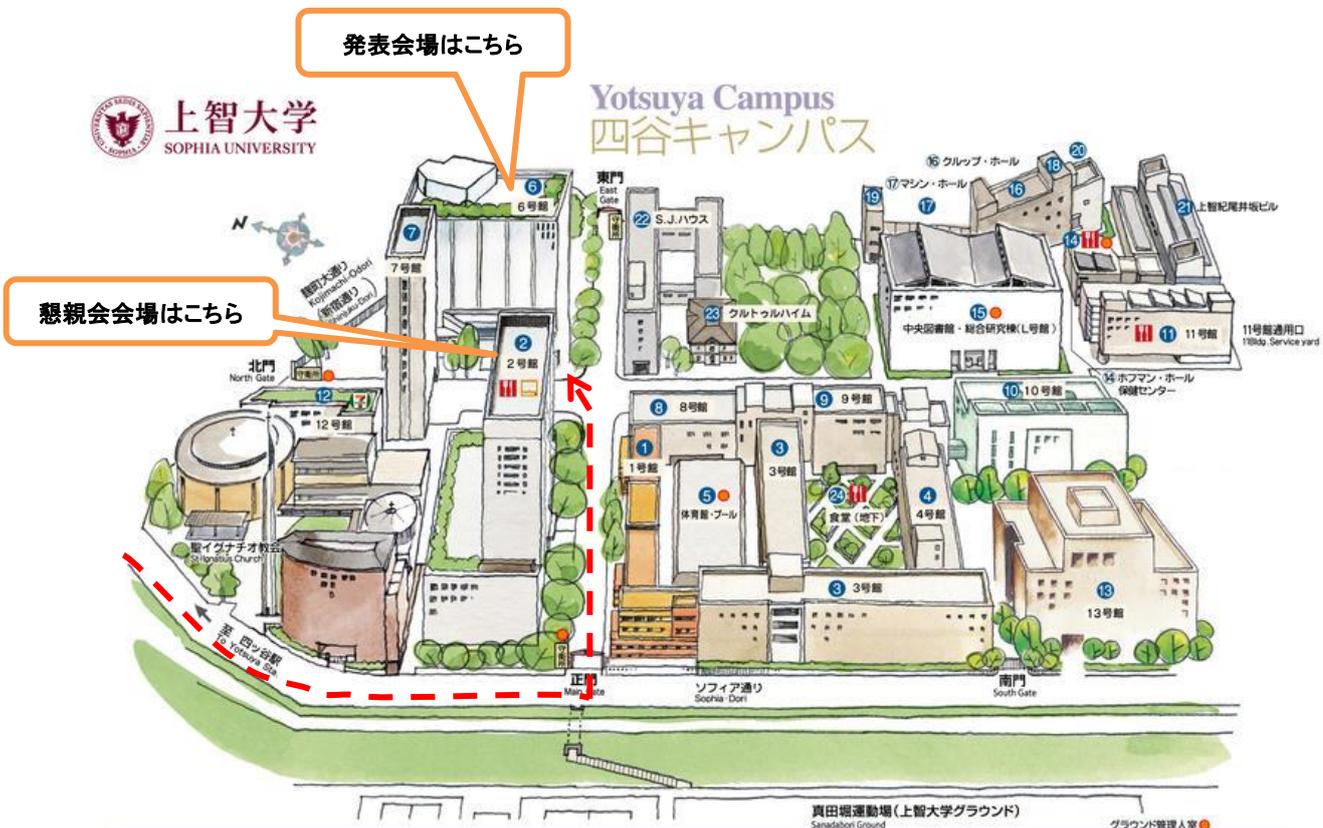
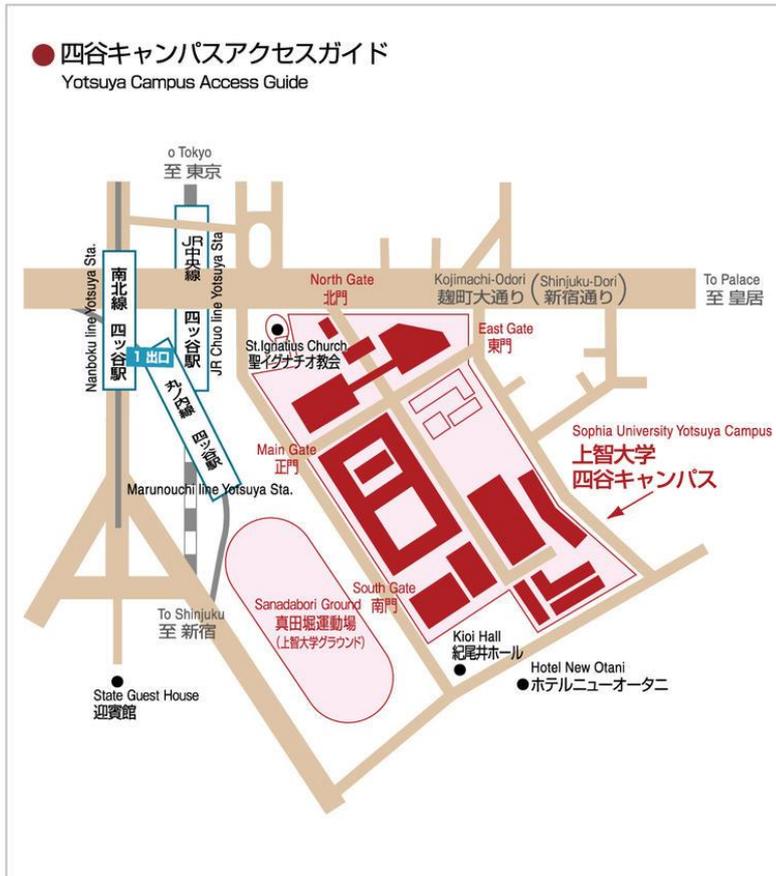
- ・ 宿泊先は会員各自でご手配ください。ホテルは予約しにくくなることもありますので、早めの予約をお願いいたします。JR 中央線沿線、東京メトロ丸の内線、東京メトロ南北線沿線ならば乗り換え不要です。
- ・ 14日、15日に営業している学内の食堂・コンビニエンスストアは以下の通りです。この他にも JR 四ツ谷駅周辺に飲食店が多数あります。  
 14日（土）： 2号館5階 学生食堂（11：00～14：00）  
 2号館5階 サブウェイ（10：00～15：00）  
 11号館地下1階 ラウンジ（11：00～15：00）  
 12号館地下1階 セブン・イレブン（10：00～20：00）  
 ホフマンホール4階 東京ハラルデリ&カフェ（10：00～18：00）  
 15日（日）： 12号館地下1階 セブン・イレブン（10：00～17：00）
- ☆ 日曜日は学内の食堂が営業していませんが、JR 四ツ谷駅の駅ビル「アトレ四谷-atre-」内にテイクアウト可能な飲食店やスーパー「成城石井」などがあります（午前8時開店）。
- ・ 駐車場はありませんので、自家用車でのご来場はご遠慮ください。

#### 【会場校までの交通機関等】

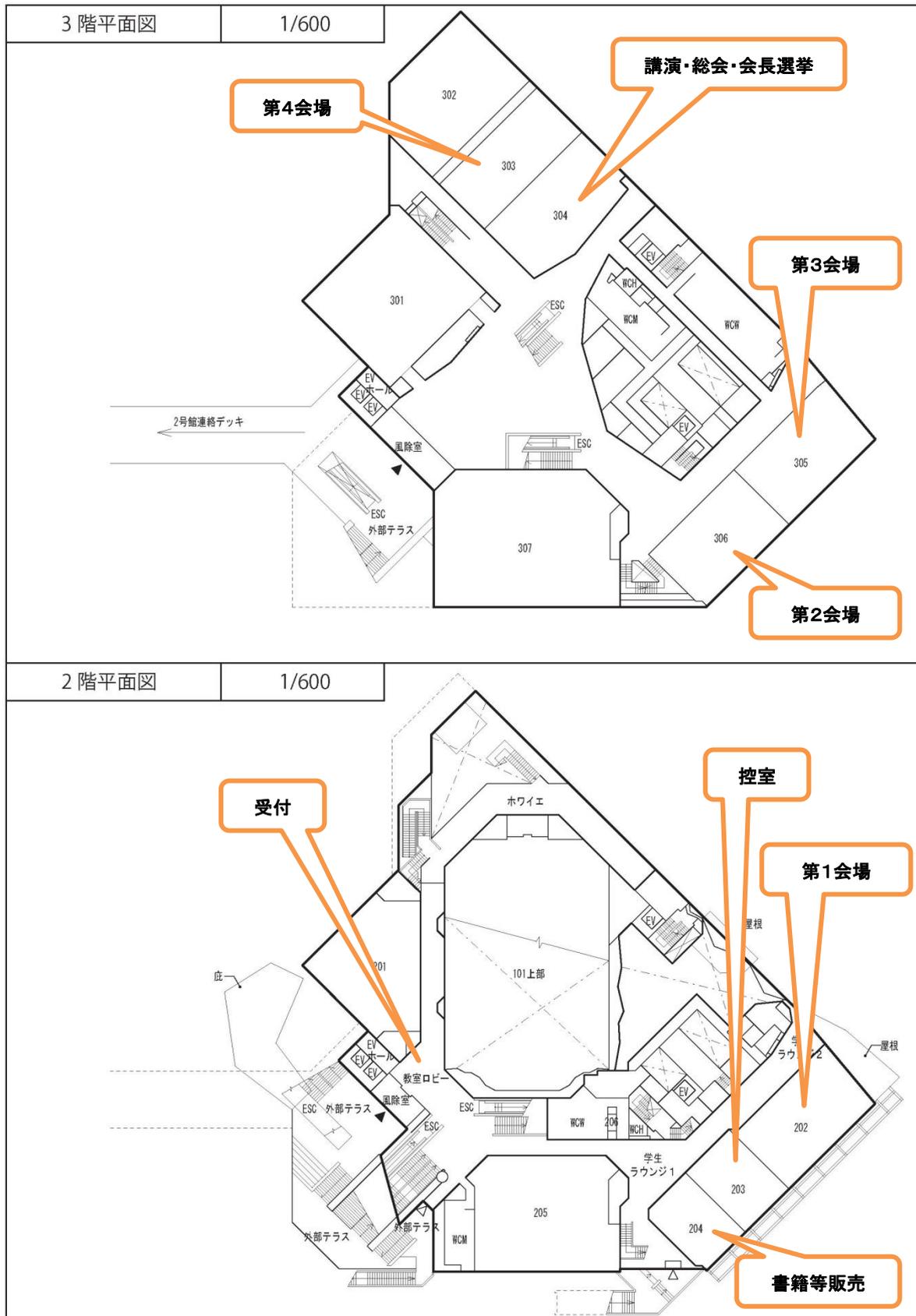
JR 中央線、東京メトロ丸の内線・南北線／四ツ谷駅（麴町口・赤坂口）から徒歩5分

【上智大学四谷キャンパスマップ】

☆ 全国大会当日（14・15日）は北門（麹町大通り・新宿通り側）が閉鎖されており通行できません。また、南門は常時通行できません。キャンパスマップの点線に沿ってお進みください。



【メイン会場平面図】



**【会場説明】**

〈受付〉 6号館 (ソフィアタワー) 2階 教室ロビー

〈控室〉 6号館 (ソフィアタワー) 2階 6-203 教室

〈書籍等販売〉 6号館 (ソフィアタワー) 2階 6-204 教室

〈発表会場〉 第1会場 (6-202 教室) : 開会式、理事会、ブロック①、④、⑧、⑫、⑮

第2会場 (6-306 教室) : ブロック⑤、⑨、⑬、⑯、⑱

第3会場 (6-305 教室) : ブロック②、⑥、⑩、⑭、⑰、⑲

第4会場 (6-303 教室) : ブロック③、⑦、⑪

〈大賞受賞記念講演〉 6号館 (ソフィアタワー) 3階 6-304 教室

〈定例総会・会長選挙〉 6号館 (ソフィアタワー) 3階 6-304 教室

**懇親会のお知らせ (Банкет)**

日時: 10月14日(土)18:30-20:30 (14 октября, сб., 18:30-20:30)

場所: 2号館5階学生食堂 (Корпус №2, 5 этаж, студенческая столовая)

常勤講師: 7,000 円 (для штатных преподавателей-членов ЯАР – 7,000 иен)

非常勤講師: 4,000 円 (для внештатных преподавателей-членов ЯАР – 4,000 иен)

大学院生: 3,000 円 (для аспирантов-членов ЯАР – 3,000 иен)

国外参加非会員: 5,000 円・参加費込み (для зарубежных участников конференции-не членов ЯАР – 5,000 иен включая регистрационный взнос)

支払い: 当日受付にて (Способ оплаты: на стойке регистрации, наличный расчет)

☆ご出欠のお知らせを 10月4日(水)まで にお願ひします (exe\_conf@yaar.jp.org)。

☆会場の 2号館と 6号館は 3階の渡り廊下で接続しています。総会終了後、要所で学生や実行委員が案内いたします。

Корпус №2 для банкета и корпус №6 для докладов соединены на третьем этаже переходом. После пленарного заседания участникам конференции покажут, как идти в корпус №2.

# 日本ロシア文学会第 67 回研究発表会

## 報告要旨集

---

|     |                    |  |
|-----|--------------------|--|
| A01 | 杉野ゆり               | プーシキン『青銅の騎士』と『漁師と魚の話』: 自伝的要素の問題に寄せて  |
| A02 | 山下大吾               | プーシキンの抒情詩「...再び私は訪れた」の一解釈  |
| A03 | 北井聡子               | ファルスを持つ女-グラトコフ『セメント』のヒロイン・ダーシャについて   |
| A04 | 古川 哲               | プラトノフ『手回しオルガン』におけるト書きの役割: 登場人物の移動に注目しつつ  |
| A05 | 佐藤貴之               | 革命後のロシア文学における「家」の表象  |
| A06 | КОЛЕСНИКОВА Елена  | Александр Блок и медиасреда начала XX в. (по архивным материалам Пушкинского Дома РАН)                 |
| A07 | КОВТУН Наталья     | Современный русский традиционализм: идеология, эстетика, перспективы                                   |
| A08 | 泊野竜一               | 『貧しき人々』における対話表現の問題   |
| A09 | 上西恵子               | 『罪と罰』における新しいエルサレム、神、ラザロの復活   |
| A10 | 樋口稲子               | ドストエフスキーの創作における特殊性   |
| A11 | ОРЕХОВ Борис       | Метрические ошибки В.А. Жуковского в переводе «Одиссеи»  |
| A12 | ФЕДОСЕЕВА Татьяна  | Онтология личности в лирике Я.П. Полонского  |
| A13 | 山路明日太              | レールモントフ『預言者』をめぐる一考察  |
| A14 | 大野斉子               | ソログーブの作品における香りの表現  |
| A15 | 南平かおり              | 1950年代の日本児童文学界におけるロシア翻訳児童文学 —ノーソフ作福井研介訳『ヴィーチャと学校友だち』を中心に—  |
| A16 | 平松潤奈               | ドストエフスキーにおける貨幣   |
| A17 | 塚田 力               | 『1890年チェーホフによるサハリン住民調査資料』における古儀式派住民と、チェーホフにおける古儀式派のイメージ  |
| B01 | 光井明日香              | ロシア語における男性・女性のペアを成す人間を表す名詞をめぐる   |
| B02 | 金子百合子              | ロシア語と日本語における「動作の限界」の語彙（語形成）的表現・文法的表現   |
| B03 | ЛАТЫШЕВА Светлана  | Стихотворения как дидактический материал для постановки произношения и интонации у японских студентов. |
| B04 | 丸山由紀子              | パホーミイ・セルブ（ログフェート）直筆写本における言語的特徴に関して —『ラドネシのセルギイ伝』を資料として—  |
| B05 | 青山忠申               | 『アヴァクム自伝』におけるアクセント選択とその文体的役割について   |
| B06 | 渡部直也               | 語の活用における出没母音の交替の回避   |
| B07 | 中野悠希               | ロシア語における y+生格と状況語中の свой との照応条件について  |
| B08 | 東出 朋               | ロシア語の呼びかけ語のポライトネス的用法   |
| C01 | 宮崎衣澄               | 大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスをめぐって  |
| C02 | 渡辺 圭               | 現代ロシア正教会の霊的文献  |
| C03 | БОБОРЫКИНА Татьяна | В поиске визуальной метафоры: Достоевский на языке балета и кино                                       |

---

- 
- C04**    БЛИНОВ Евгений  
          Виктор Виноградов об историчности «национализма» Пушкина в контексте новой культурной политики тридцатых годов
- C05**    三浦領哉    В.Ф. Одо́ефсский 『ロシアの夜』と音楽思想
- C06**    一柳富美子    知られざるチャイコフスキイ：日記の未紹介ページから
- C07**    神竹喜重子    19世紀末から20世紀初期のロシアにおける芸術メセナ ―古儀式派の資本家と私立歌劇場―
- C08**    江村 公    メディエーターとしてのニコライ・プーニン ―十月革命後の芸術組織再編の中で―
- C09**    伊藤 愉    ロシア国立芸術史研究所の活動と1920年代演劇
- C10**    鈴木佑也    ソ連建築界と近代主義建築における都市像の軋み：第四回近代建築国際会議（CIAM）モスクワ開催の頓挫理由究明に向けて
- C11**    恩田義徳    聖アトス山ゾグラフォス修道院文書庫の露和辞典について
- C12**    林 由貴    在外ロシア思想における経験の概念（ゲッセンとグールヴィチ）
- C13**    前田しほ    旧ソ連の記念碑における寓意的女性像：ロシア・南コーカサス・ウクライナの現状と比較考察
- 
- P01**    ロシア・フォークロアの現在  
          （伊東一郎、熊野谷葉子、藤原潤子、柚木かおり）
- P02**    Между источниками и списками: текстологические исследования средневековой славянской письменности  
          (МОЛДОВАН Александр, ХАТТОРИ Фумиаки, МИТАНИ Кэйко)
- P03**    Революционный импульс: искусство, наука, идеология  
          (КОМИЯ Митико, КОВТУН Наталья, НОНАКА Сусуму, ГРЕЧКО Валерий, КИМ СуКван)

---

日本ロシア文学会

2017年10月

## Abstracts of Research Papers Accepted for Presentation at the 67th Annual Assembly of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

---

|            |                    |  |
|------------|--------------------|--|
| <b>A01</b> | СУГИНО Юри         | Поэма «Медный всадник» и «Сказка о рыбаке и рыбке» А.С. Пушкина: к проблеме автобиографических элементов   |
| <b>A02</b> | ЯМАСИТА Даиго      | К интерпретации стихотворения Пушкина «...Вновь я посетил»   |
| <b>A03</b> | КИТАИ Сатоко       | Женщина с фаллосом: Образ Даши в романе Гладкова «Цемент»  |
| <b>A04</b> | FURUKAWA Akira     | Функция ремарок в пьесе Андрея Платонова «Шарманка» с точки зрения описания движений главных героев  |
| <b>A05</b> | САТО Такаюки       | К вопросу об образе «дома» в русской литературе после Октябрьской революции  |
| <b>A06</b> | KOLESNIKOVA Elena  | Alexander Blok and a media sphere of the beginning of the 20th c. (on archival materials of the Pushkin's Dom of RAS)  |
| <b>A07</b> | KOVTUN Natalia     | Modern Russian traditionalism: ideology, esthetics, prospects  |
| <b>A08</b> | ТОМАРИНО Рёити     | Проблемы литературного приема выражения диалога в романе Ф.М. Достоевского «Бедные люди»   |
| <b>A09</b> | УЭНИСИ Кэйко       | Новый Иерусалим, Бог и воскресение Лазаря в романе Ф.М. Достоевского «Преступление и наказание»  |
| <b>A10</b> | ХИГУТИ Инэко       | О характерных особенностях творчества Достоевского   |
| <b>A11</b> | OREKHOV Boris      | Metrical mistakes by V. A. Zhukovsky in the «Odyssey» translation  |
| <b>A12</b> | FEDOSEEVA Tatiana  | Ontology of personality in the lyrics of Y. Polonsky   |
| <b>A13</b> | ЯМАДЗИ Асута       | К стихотворению М.Ю. Лермонтова «Пророк»   |
| <b>A14</b> | ОНО Токико         | Выражение аромата в произведениях Федора Сологуба  |
| <b>A15</b> | НАМПЭЙ Каори       | К вопросу о переводе произведений русской детской литературы: в японском детском литературном мире 1950-х годов  |
| <b>A16</b> | ХИРАМАЦУ Дзюнна    | Деньги в творчестве Достоевского   |
| <b>A17</b> | ЦУКАДА Цутому      | Старообрядцы в «Материалах сахалинской переписи А.П. Чехова. 1890 год» и образы старообрядцев у А.П. Чехова  |
| <b>B01</b> | МИЦУИ Асука        | О существительных, которые называют людей и имеют родовые пары в русском языке   |
| <b>B02</b> | КАНЭКО Юрико       | Лексические (словообразовательные) и грамматические способы выражения идеи предела действия в русском и японском языках  |
| <b>B03</b> | LATYSHEVA Svetlana | Poems as materials for teaching pronunciation and intonation to Japanese students  |
| <b>B04</b> | МАРУЯМА Юкико      | Языковые особенности в автографе Пахомия Сербя (Логофета) – на материале «Жития Сергия Радонежского» –   |
| <b>B05</b> | АОЯМА Таданобу     | Акцентовки и их стилистические функции в «Житии протопопа Аввакума»  |
| <b>B06</b> | ВАТАБЭ Наоя        | Отсутствие чередования беглых гласных в парадигме  |
| <b>B07</b> | НАКАНО Юки         | Условия употребления возвратного притяжательного местоимения «свой», стоящего в обстоятельстве и имеющего своим антецедентом предложно-падежную форму «у+род.» |
| <b>B08</b> | ХИГАСИДЭ Томо      | Анализ употребления обращений в русском языке с точки зрения «Вежливости» П.Брауна и С. Левинстона   |
| <b>C01</b> | МИЯДЗАКИ Идзуми    | Иконостас в соборе Покрова Пресвятой Богородицы в Осака  |
| <b>C02</b> | ВАТАНАБЭ Кэй       | Духовные литературы современной Русской Православной Церкви  |
| <b>C03</b> | BOBORYKINA Tatiana | In Search of the Visual Metaphor: Dostoevsky in the Language of Ballet and Cinema  |
| <b>C04</b> | BLINOV Evgeny      | Viktor Vinogradov about the historicity of Pushkin's "nationalism" in the context of new cultural policy in the 30-s   |
| <b>C05</b> | МИУРА Рэйя         | «Русские ночи» В. Ф. Одоевского и его мысль о музыке   |

---

- 
- C06** ХИТОЦУЯНАГИ Фумико  
Неизвестный Чайковский: из необнаруженных листов дневников
- C07** КАМИТАКЭ Кизэко  
Меценатство в России с конца XIX века до начала XX века: старообрядческие предприниматели и их частные оперные театры
- C08** EMURA Kimi  
Nikolai Punin as Mediator — In the midst of Reformation of Art Institutions after the October Revolution
- C09** ИТО Масару  
О действии ГИИИ (Государственного Института Истории Искусств) и театральном искусстве 1920-х годов
- C10** СУДЗУКИ Юя  
Расхождение во взглядах на концепцию города между модернистской архитектурой и советским архитектурным сообществом: анализ причин неосуществления 4-ой конференции Международного конгресса современной архитектуры (СИАМ) в Москве
- C11** ОНДА Ёсинори  
Русско-японский словарь в архиве монастыря Зограф на Святой Горе Афон
- C12** ХАЯСИ Юки  
Концепция переживания в философии русского зарубежья (С. И. Гессен и Г. Д. Гурвич)
- C13** MAEDA Shiho  
About Allegorical Female Image in the Former Soviet Monuments: Comparative Research on Russia, Ukraine and South Caucasus
- P01** Русский фольклор сегодня  
(ИТО Итиро, КУМАНОВА Ёко, ФУДЗИВАРА Дзюнко, ЮНОКИ Каори)
- P02** Между источниками и списками: текстологические исследования средневековой славянской письменности  
(МОЛДОВАН Александр, ХАТТОРИ Фумиаки, МИТАНИ Кэйко)
- P03** Революционный импульс: искусство, наука, идеология  
(КОМИЯ Митико, КОВТУН Наталья, НОНАКА Сусуму, ГРЕЧКО Валерий, КИМ СуКван)
- 

## JASRL

October 2017

以下の研究報告要旨は著者に無断で引用できない。  
Not for quotation without the author's agreement.

【A01】プーシキン『青銅の騎士』と『漁師と魚の話』：  
自伝的要素の問題に寄せて

杉野 ゆり

プーシキンの民話『漁師と魚の話』の自筆完成稿は存在せず、草稿に 1833 年 10 月 14 日の日付が記されていることから、10 月 6 日から 31 日にかけて創作された長詩『青銅の騎士』と同じ時期に執筆されたと考えられている。M. エブシュテインは、両作品が、小屋だけのわびしい光景から始まり、中間部で様々な事件が連続して起こるが最後に夢のように消え、一巡して最初の場面とよく似た場景に戻るという点で作品構造が類似していること、荒れる海の描写に共通する表現が多いことを指摘して、1 つの事件が悲劇と喜劇に分化した相補的な作品と見ている。発表者は、エブシュテインの以上の見解に同意しつつ、さらに、『漁師と魚の話』の世界の構造やモチーフや細部には、『青銅の騎士』を執筆したプーシキンの心理状態や自伝的要素が反映されていることを以下のよう考察したい。『漁師と魚の話』の始まりで老夫婦が「33 年間暮らしてきた」ことが語られるが、「33」は、プーシキンが『青銅の騎士』を創作した 1833 年に含まれる数字であり、老妻の願いを聞き入れた結果、空中楼阁拡大に関わる老漁師は、『青銅の騎士』でファンタジーを次々に生んで詩的世界を構築する詩人を連想させる。民話の草稿では、欲望を増大させていく老婆の描写に「バビロンの塔」「ローマ法王」の言葉が散見するが、これは、『青銅の騎士』が聖書や『神曲』を下部テキストとして利用していることを想起させ、地位が上がって尊大になる老婆の姿は、長詩でエカテリーナ 2 世がバビロンの大淫婦に暗喩されていることと結びつく。プーシキンは、『青銅の騎士』で妻ナターリアを『神曲』のベアトリーチェの形象まで高めたが、民話では彼女を老漁師の怒りっぽい妻に格下げし、自身を妻にこき使われる哀れな老人に仕立てて、己自身と自分たち夫婦の今後を秘かに風刺したのではないかと。民話の始めと結末で「船」の意味をも併せ持つ「桶」が描かれていることは、航海のテーマに貫かれて「船」が多義的な意味を持つ『青銅の騎士』を想起させる。壮大な詩的世界が夢のように消えた後は、詩人に元の木阿弥の平凡な生活が続くことを民話の最後の場面で暗示している。

(すぎの ゆり、桃山学院大学)

【A02】プーシキンの抒情詩「...再び私は訪れた」の  
一解釈

山下 大吾

1835 年 9 月執筆のプーシキンの抒情詩「...再び私は訪れた」は、彼の晩年に記された作品の中で代表作として広く認められている一編である。その内容は、南ロシアでの流刑を経て、当時より 10 年前に 2 年間を過ごした蟄居の地ミハイロフスコエにおける同年再訪時の体験を、流刑当時の記憶と重ね合わせながら詩的表象に高めたものとなっている。

自伝的要素が強く反映されていること、修辭的な装飾が比較的少なく、若干の例を除いて語彙や統辭の点で口語的なスタイルが貫かれていること、さらに無韻詩という彼の作品の中では例外に属する詩形が採用されていることなどが、彼の抒情詩の中でもこの作品を一層際立たせる一因となっている。

作品の後半での松の木に関する詩行などから読み取れる時の歩みの不可逆性、並びに自身の死、さらに後の世代における自身の名声、評価に対する期待という哲学的あるいは人生論的テーマは、翌年の抒情詩「私は自らに人技ならぬ記念碑を建立した」を始めとして、他作品の中でも様々な形で度々繰り返されるものであり、これまでの同抒情詩の研究でも主要な題目の一つとなっている。また無韻詩という詩形から、先行するジュコフスキイのドイツ語からの翻訳詩、さらにワーズワースなどのイギリスロマン主義の抒情詩との関連や影響も指摘されている。

本報告ではこれらの内容、特徴などを考慮に入れつつ、同時期にプーシキンが記した『ローマ生活物語』と仮称される未完の小説などで認められる西洋古典的テーマとの関わりに注目する。晩年のプーシキンの作品においては、ユウェナーリスの訳詩や『エジプトの夜々』を始めとして西洋古典的テーマが主要な位置を占めており、その中でも上述の「記念碑」に結実するホラーティウスとの関連並びに影響は極めて大きなものと捉えられるであろう。『ローマ生活物語』にはアナクレオンの小詩及びアナクレオンテア詩の部分訳が二編、さらにホラーティウスの『詩集』からの部分訳が二編収められており、それらには一編を除いて完訳に近い形の訳詩も残されている。これらの作品のほか、関連の深い『詩集』の他の一編との比較、対照を通して、「...再び私は訪れた」におけるホラーティウスの影響の可能性を検討したい。

(やました だいご、京都大学)

【A03】ファルスを持つ女-グラトコフ『セメント』の  
ヒロイン・ダーシャについて

北井 聡子

グラトコフの長編小説『セメント』(1925)は、社会主義リアリズムの規範としてソ連時代、長らく参照されてきた記念碑的作品である。物語は、公的／私的領域でそれぞれ展開される2つのプロットからなる。即ち、内戦と革命の時代に荒廃したセメント工場を、官僚主義者や反革命勢力からの妨害と戦いながらも再建せんとする主人公グレプ・チュマーロフの奮闘が一つ。そして、もう一つは、グレプと妻ダーシャとの関係を軸に展開される共産主義的な新しい愛の模索である。家父長的家族の存続に固執するグレプに対し、ダーシャは夫が戦地に赴いている間に変化を遂げていた。党女性部の一員として働く彼女は、もはやかつてのような従順な妻ではなく、家事労働や子育て、そして夫婦の性的関係も拒み、新しい生を創出するために全てを捧げているのである。

さてヒロイン・ダーシャが劇的な変貌を遂げるきっかけとなったのは、夫の不在中に白軍から受けた陵辱事件である。従来この出来事は、彼女の個人的な成長を促した一つのエピソードとしてのみ解釈されてきた。しかし本研究では、古代ローマが王政から共和制へと移行する契機となったルクレティアという女の陵辱事件をヒントに、ダーシャの受けた試練が、私的な問題を遙かに超え、民衆の公的な政治行動を規定していく要因となっていることを明らかにしたい。さらに彼女自身は、陵辱事件を通過することで、ファルスを与えられ、集団を支配する超越的な「法」となって世界に君臨することになる。また小説の中で、ファルスは「赤い頭巾」として表現され、人々の間を巡回することになるのだが、この頭巾がもつシンボリックな役割にも注目したい。

(きたい さとこ、東京大学)

【A04】プラトーフ『手回しオルガン』におけるト  
書きの役割：登場人物の移動に注目しつつ

古川 哲

アンドレイ・プラトーフは20世紀ロシアの小説家として評価が定着しているが、近年、彼の戯曲に関して研究や翻訳が進んでいる。プラトーフ『手回しオルガン』は1930年に書かれたと推定されている戯曲で、執筆と同時代の第一次五カ年計画の時期の地方を舞台に、農業集団化と工業化に翻弄される人民の生活が風刺をまじえて描き出されている。この戯曲では、飛行船の建造費用を集めるという任務を課されて地方を旅する少年たちが一貫して登場し、プロットを結びつけている。登場人物が移動を経て特定の場所に到着し、そこでのエピソードが展開されるという点はプラトーフの小説である『チェヴェングール』や『土台穴』にも共通するものだ。一方で、戯曲において登場人物の移動を表現するさいには、小説とは異なる制約があると推測される。登場人物を三人称で扱い記述することを小説のようには行えないためである。このとき、プラトーフの戯曲を小説と関連付けつつ論じるために有用なのはト書きに注目して分析を行うことである。すでに『手回しオルガン』に関しては、ト書きに注目しつつ著者が小説内の挿話にどのような立場を取っているかを分析する研究が存在する。本発表は先行研究を踏まえつつ、戯曲を、プラトーフ作品において伝統的なもう一つの論点から分析する。作品の構成を踏まえて述べれば、『手回しオルガン』が有する三幕のうち、第一幕では少年たちの移動が扱われ、第二幕と第三幕においては特定の機関に場所が設定されている。そして、幕のそれぞれの冒頭には、場面の設定に関するややまとまった記述がト書きとして置かれている。したがって、本発表における議論では、第一幕における登場人物の移動、および各幕冒頭に置かれた、場面設定についての記述が主な分析の対象になる。このような分析において期待されるのは、プラトーフの戯曲を彼の小説と関連づけて理解する可能性、および戯曲の執筆においてプラトーフの創作に新しくもたらされたものについて洞察する可能性である。

(ふるかわ あきら、東京外国語大学)

【A05】 革命後のロシア文学における「家」の表象

佐藤 貴之

本報告では十月革命直後の文学作品に描かれた「家」の表象に焦点を当て、その多様性に迫る。

近年では T・ラドムスカヤや A・シュクリンのような研究者が指摘している通り、ロシアの古典文学において「家」は物理的建造物であると同時に、祖国、大地、農村、領地など、ロシア的人間の精神的故郷を代表するトポスも意味してきた。特にロシアではピョートル大帝による西欧化の結果として、上流社会の間で文化的アイデンティティの混乱状態が長く続いたことから、十九世紀以降の文壇ではロシア民族の「家」を探求する傾向が顕著であり、失われた「家」の探求という主題は一つの伝統をなしているといつてよい。そして、この主題は祖国を分断した革命期のロシアにおいてより一層の重要性を増したと考えられる。

亡命ロシアでは『私はロシアを持ち去った』の著者 P・グーリのように、古典的な「家」を保持しようとする傾向も強かったが、祖国ロシアにおいて「家」の破滅は不可避的で、古い「家」に代わる新たな「家」の探求が不可欠であった。そこで本研究では、二つのロシアを生き残った作家たち、具体的には M・ブルガーコフ、B・ピリニャーク、A・トルストイの作品に焦点を絞り、「家」の表象を多角的に考察、その特徴を明らかにする。

(さとう たかゆき、東京外国語大学)

【A06】 Александр Блок и медиасреда начала XX в.  
(по архивным материалам Пушкинского Дома РАН)

КОЛЕСНИКОВА Елена

В докладе Е. И. Колесниковой «Александр Блок и медиасреда начала XX в. (по архивным материалам Пушкинского Дома РАН)» ставится целью рассмотреть отношение А. Блока к формирующейся медиареальности начала XX в. На примере его статьи «Искусство и газета», а также выделенных его рукой текстов в газете «Российский гражданин» (из личного архива поэта), демонстрируется понимание Блоком воздействующей и манипулятивной силы средств массовой информации и зарождающихся пропагандистских технологий. Показываются примеры использования поэтом прецедентных медиатекстов в стихах (стихотворение «Из газет»).

Предлагается лексический анализ крылатого выражения из поэмы «Двенадцать» («мы на горе всем буржуйам мировой пожар раздуем»), ставшего вскоре текстом для революционного плаката, а также впервые анализируется плакат I Мировой войны «Мировой пожар», сохранившийся в личном архиве А. Блока, как его предполагаемый источник.

В докладе отмечается, что тесное сотрудничество Блока с художником П. Анненковым на этапе издания поэмы «Двенадцать» свидетельствовало о тяготении его в сторону креолизованного текста.

А. Блок представлен в докладе как активный субъект медиасреды, проявивший себя практически во всех ее ипостасях – и как потребитель других текстов, осмысливший новые семантические поля, и как исследователь-аналитик, и как активный читатель творец и, конечно, как творец прецедентных текстов, используемых до сих пор в многочисленных прямых цитациях и реминисценциях – в плакатах, художественных текстах, шаржах, заглавиях статей, в современных фильмах и рекламе.

Делается вывод о кризисе лирического нарратива и выходе А. Блока за его рамки, об осознании им медиа как социального института, взявшего на себя функцию репрезентации изменившейся картины мира.

( Колесникова Елена, Россия文学研究所 )

【A07】 Современный русский традиционализм:  
идеология, эстетика, перспективы

КОВТУН Наталья

В современной русской словесности интерес к эстетике традиционализма очевиден. Одновременно вопрос о статусе *традиционализма* в культуре последних лет, об эволюционных возможностях традиции, о перспективах преемственности соответствующей эстетике решается предельно дискуссионно. *Традиционализм* и *авангард* существуют в истории культуры по принципу дополтельности – как миметический и эвристический типы творчества. Истоки традиционализма в мифе, он антропоцентричен, ориентирован на освещенные формы культуры, утверждение вечных смыслов, авангард, напротив, борется с традицией как косной, неразвивающейся догмой. Борьба космоса и хаоса – вечный сюжет искусства.

На уровне литературоведения традиционализм понимается как набор ценностных символов, моделей поведения, определяющих нормы социализации и границы коллективной идентичности. Истоки современного традиционализма восходят к «деревенской прозе» и «тихой лирике», ставшими популярными в «долгие 70-е». Лидером художественного традиционализма считают В. Распутину, его «Прощание с Матерой» воспринимается как манифест направления и текст, завершающий его. Период 1980-х–1990-х пройдет под эгидой модернизации (постмодернизма), традиционализм уравнивают с консерватизмом, практически исключают из вузовских программ и учебников. Между тем разочарование в идее глобализации, проекте постмодернизма (начало 2000-х) вновь актуализируют реалистические принципы письма, что найдет продолжение в течении «нового реализма» (С. Шаргунов, Р. Сенчин, З. Прилепин, М. Елизаров, А. Снегирев и др.). Важнейшим принципом творчества эти писатели провозглашают детальное описание «новой реальности», без идеализации, без символики, без обобщения, на уровне физиологических очерков. Эстетическими ориентирами станут тексты Э. Лимонова, А. Проханова, «деревенщиков». Авторы «нового реализма» активно выстраивают собственную мифологию, участвуют в политике, стараются примирить советский и антисоветский дискурсы, вести поиск «авангардизма в консерватизме», где консерватизм представляет собой сокровищницу образов русской классики, а авангардизм – новшества, которые, отражают актуальные общественные реалии.

(コフトゥン ナタリヤ、  
クラスノヤルスク国立教育大学)

【A08】『貧しき人々』における対話表現の問題

泊野 竜一

『貧しき人々』は筆耕を主たる業務とする冴えない中年官吏ジェーヴシキンと、両親に先立たれた薄倅の美少女ワルワラの往復書簡から構成される若きドストエフスキーの処女作である。小説では、財産、地位、名誉とは無縁のごくありきたりの人物である二人が運命の荒波に翻弄される様が、手紙を通じた二人の対話によって叙述されていく。

この小説を一読した際、主要なものとしても以下の二つの疑問が浮かび上がる。一つは、同じアパートに住んでいるジェーヴシキンとワルワラが、直接顔を合わす場面がほとんど言及されないという疑問である。同じアパートの住人であれば面会を繰り返すことも十分可能であろう。それならば、わざわざ書簡を頻繁にやり取りする必然性の根拠に乏しい。もう一つは、男女の対話を描きたいなら、二人の出会いの場面を作りそこで存分に語らせるほうがより多彩で臨場感のある対話を実現できるのではないか、という疑問である。

これらが物語のリアリティーを損ない、読者の興をそぐ危険を冒す可能性をおそらくは自覚しつつも、なぜドストエフスキーは書簡体形式の作品を発表したのであろうか。

往復書簡は、手紙の内容に対してお互いが応答しあうという形式をもっており、この形式に対話性を感じとることは十分可能である。従ってドストエフスキーが初期の段階においてすでに文学作品における対話表現にこだわりがあったことは想像に難くない。だが、往復書簡では対話者同士が実際にお互い向かいあっているわけではない。したがって往復書簡中の対話の場ではお互いの意識の交流が起こらない。いきおい、『貧しき人々』の中の対話は、手紙を書いている二人の主人公が発するモノローグの交代とでもいうべき様相を呈することとなる。このように、対話（ディアローグ）とは一見相反するモノローグの要素が対話の中に色濃く含まれることが、ドストエフスキーの対話表現であり、その理念であると考えられる。

また、『貧しき人々』の創作過程の調査による小説の成立過程から見出される本作品の特長—この小説は、ワルワラが幼き日の思い出を綴った覚書「ワルワラの手帳」の部分が最初に成立したとの仮説を参考にしつつ—や、本論の分析から導き出されたドストエフスキーの対話の理念にもとづいて考えれば、『ワルワラとの手紙のやり取りを含むすべてはジェーヴシキンのフィクションであった』と推定することもできる。

(とまりの りょういち、早稲田大学院生)

【A09】『罪と罰』における新しいエルサレム、神、ラザロの復活

上西 恵子

「新しいエルサレム、神、ラザロの復活を信じるか」というポルフィーリイの問いに、ラスコーリニコフは「信じる」と答えた。従来の研究ではほとんど看過されてきたこの問いと答えが意味しているものを明らかにするために、以下のような作品分析を試みたい。

老婆殺害決行前、ラスコーリニコフは一旦その計画を断念する。その直前、彼は小ネヴァ河畔で「花」を観察する。『罪と罰』におけるこの花のエピソードの空間、「棺」と「船室」のイメージ、自殺前夜のスヴィドリガイロフの夢などに着目しながら、本報告では、まず、「花の観察」の情景とラスコーリニコフの意識との関係、スヴィドリガイロフの夢に表れる彼の無意識を分析したい。

『罪と罰』と聖書、あるいはキリスト教との関係を論じる際には、「ラザロの復活」朗読の場面に今なお関心が寄せられているが、その朗読中、ラスコーリニコフは「盲目で不信心」としてソニーヤによって定義される。「ヨハネ福音書」では「見る」と「信じる」ことが密接な関係にある。「ヨハネ福音書」に基づいて、ラスコーリニコフは「盲目で不信心」とあるというソニーヤの言葉の意味の解釈を試みたい。

「神の真理」と「人間の本性」が勝利を得て、犯罪人の信念を打ち砕くとドストエフスキーは、1865年、カトコフ編集長に伝えている。完成稿でラスコーリニコフは、「花の観察」の直後、「主よ」と祈る。

以上のことを踏まえて最後に、共観福音書などを参照しながら、「花の観察」、ポルフィーリイの問いに対するラスコーリニコフの答えの意味を考察したい。

(うえにし けいこ、関東支部)

【A10】ドストエフスキーの創作における特殊性

樋口 稲子

ドストエフスキーの創作において、キリスト教以前のギリシャ・ローマ文学との関連は主にメニッペアという形態を通してその深い影響が現れていることは、バフチンの指摘で明らかであるが、その例証が余りにも少ない。また「大審問官」のキリストと大審問官が人間の幸福について主張する時、神と神に従う者との間にカーニバル的展開があることは明白である。作家は、人間と世界の実相を求めて、世界を支えて来たキリスト教の倫理構造を破壊しようとする訳だが、こうした試みは、「大審問官」をカトリック批判と見做しても、キリスト教に対して非常に挑戦的であることには変わらない。だが、同時にキリスト教を引いて人類の大調和の具現化や地上での神の国の建設を提示し、キリスト教という宗教性をも表している。このようにドストエフスキーの文学には、本質的に異質なものが無理なく併存し、それらを複数の登場人物がそれぞれの声として発することで具体的に表現し、彼らの世界を引き込んでくる。特に未完で終わった第二部のアレクセイの生涯は、第一部の人物構成がポリフォニー構成であって、それぞれ個別に明確な特徴付けがされて、登場人物が創られているのに対して、第二部のプランではアレクセイ一人の人生に複数の人間の人生が収斂するように計画されていた。それはキリストに、様々な生命が収斂してゆく姿の様に思われる。本報告では、これらを具体的に考察したい。また、こうした作品の大きな構成を芳醇な彩にしたモチーフにも言及したい。

(ひぐち いねこ、早稲田大学院生)

**【A11】 Метрические ошибки В. А. Жуковского в переводе «Одиссеи»**

**ОРЕХОВ Борис**

В переводе «Одиссеи» Жуковского есть 49 метрически аномальных случаев. Речь идет о строках, длина которых, отличается от гекзаметра на одну стопу как в сторону увеличения, так и в сторону уменьшения.

Исследовательский вопрос в том, можно ли в принципе решить проблему внутритекстовых причин метрических аномалий, используя количественные методы анализа?

Больше всего аномалий (по 6) в IX и XII песнях (обе переведены в 1844 году). В песнях I, III, XVI, XIX—XXIV аномалий нет совсем.

Песни с аномалиями захватывают, в основном, середину поэмы. Существуют ли видимые глазу отличия песен первой группы от песен второй группы на каком-либо из возможных уровней (прежде всего, конечно, сюжетном)?

Мы использовали метрику TF-IDF, чтобы вычислить, насколько песни похожи друг на друга и кластеризовали их с помощью алгоритма k-means. Кластеры хотя и не вполне строго, но в целом соответствуют делению на песни с метрическими аномалиями и без них.

Для анализа строк был выбран ряд текстовых атрибутов, в т.ч.: 1) позиция в песне (влияет ли то, в начале, в середине или в конце песни находится аномальная строка; все песни разделены на 5 частей); 2) количество слов в строке; 3) набор ударных гласных в строке и т. д.

Лучший результат, который показал анализ атрибутов, нельзя назвать удовлетворительным, его мера качества оценивается алгоритмом в 0,05481. Эта цифра означает, что если потенциально и существует какой-то фактор, на 100 % объясняющий появление метрических аномалий, то выявленный набор атрибутов справляется с этой задачей только на 5,5 %. Следовательно, на уровне контекста песни мы можем найти причины аномалий, на уровне контекста строки — пока нет.

(Орехов Борис, Россия国立研究大学経済高等学院)

**【A12】 Онтология личности в лирике Я.П. Полонского**

**ФЕДОСЕЕВА Татьяна**

Я.П. Полонский (1819–1898) – русский поэт, в творчестве которого отразились идейно-философские и духовно-религиозные искания русского общества середины – второй половины XIX века.

Личность в поэзии Я.П. Полонского предстает в своем исторически и социально детерминированном состоянии (На пути из гостей, 1856; Дух века, 1864; На железной дороге, 1868; Симеон, царь Болгарский, 1876; Грезы, 1870–1885). Лирический герой Полонского, находясь в поиске духовных оснований жизни, воплощает и второй, рефлексивный уровень человеческого бытия («Священный благовест торжественно звучит...», 1840; Сны, 1856–1860; Старая няня, 1876; Старый тапер, 1876). Особое место в лирике Полонского занимает герой, стремящийся к высшему уровню личностного бытия – в приближении к Божественной цельности и совершенству (Бэда-проповедник, 1841; Молитва, 1859; Сумасшедший, 1859; На искусе, 1870–1885; Гипотеза, 1870–1885). Выраженная языком поэзии онтология личности обусловлена библейским контекстом: от эдемской цельности первочеловека, через внутреннюю раздвоенность ветхого и обретение нового человека в идеале Христа.

Результатом напряженных духовных исканий для Полонского стала религиозная концепция истории, определяемая отношением человека и человечества к Богу. Ветхозаветный текст представлен в лирике Полонского сюжетами о первородном грехе (В потерянном раю, 1876), первородителях (Агарь, 1850–1855), гордом/грешном царе (Вавилонское столпотворение, 1865–1870). Новозаветная история показана как путь человека к идеалу Христа (Нагорный ключ, 1871; 15 июля 1888 года, 1888; У храма, 1886–1890; Вечерний звон, 1890–1895).

К середине XIX века русская литература накопила большой материал в онтологии бытия и личности. Лирика Полонского заставляет людей обдумывать отношение человека к законам объективной действительности и осознавать свое место в ней. Место и значение личности обусловлено не столько внешними обстоятельствами, сколько законами внутреннего существования.

(Федосеева Татьяна, Россия国立大学)

## 【A13】 レールモントフ『預言者』をめぐる一考察

山路 明日太

ロシアの詩人たちはキューヘルベケルやグリーンカからデカプリストをはじめとして、「預言者」というテーマで幾つもの作品を残してきた。預言者とは元来、ユダヤ教やイスラム教における神の啓示を伝えるべき宗教上の存在であり、必ずしも直接詩人を意味するわけではない。しかし、ロシア社会において詩人は歴史的に社会の代弁者として、また先導者として特別な地位が認められてきたと言える。そのために、宗教上の預言者の有り様が詩人の姿を比喩的に表現しうるものと認識され、ロシア詩人たちは好んで自分たち詩人の役割と社会との関わり方を表現すべく、「預言者」ないし「預言」というテーマで多くの作品を残してきたように見える。

こうした作品群の中でも、プーシキンの『預言者』（1826年）とレールモントフの『預言者』（1841年）は特別な位置を占めている。プーシキンはあたかも自らの詩人としての使命の大きさを表現するかのよう、「言葉によって人々の心を焼き尽くすがよい」という神託を預言者が得るその瞬間までを、六翼天使や神を登場させつつ生々しく描き出す。他方レールモントフは、まさしくプーシキンの預言者のその後を描くが如く、下界を放浪するも石の礫を投げつけられ、自己に対する侮蔑の言葉を当てつけがましく聞かされる、社会から徹底的に拒絶された存在として預言者を描き出している。すでに多くの研究者が述べているように二つの詩には強い相関関係が認められ、レールモントフの『預言者』は「プーシキンの『預言者』への返答ないし反駁」（エイヘンバウム）のようであり、それらの視点の違いは、詩人と民衆との関係に対する両詩人の見方の違いだと考えられる。

本発表では、レールモントフの『預言者』をめぐる以上のような論点を整理し、詩人と民衆との関係にかかわる詩群をも参照しながら、レールモントフの詩人観や言葉に対する不信といった観点について、プーシキンやデカプリストたちとの比較対照の中で、考察する。また、レールモントフに特徴的な創作手法として、他の詩人・著者の作品群からの借用・利用を挙げることができるが、そのこととも合わせて多角的な観点から作品分析を試みたい。

(やまじ あすた、中京大学)

## 【A14】 ソログープの作品における香りの表現

大野 斉子

香りという枠組みからロシア文学を見渡した時、フョードル・ソログープは香りの表現を多用した作家として際立っている。香りが登場するソログープの作品のうち、今回は「香る名前」という小品を取り上げる。

「香る名前」はおとぎ話の体裁を取った短編である。本来の名前を忘れ、地上で暮らす墮天使は探求の末に我が名を突き止める。その名が呼ばれたとたん、あたりに芳香が立ち込めるというこの物語は、短いながら、象徴主義文学における香りの意味を考察するうえで重要なテーマを内包している。

この発表では以下の2点からのアプローチを試みる。

1. 名前が香るといふこの作品のテーマが、どのような意味を持つのかについてフロレンスキイの賛名論のほか、神の名をめぐる神話を材料に考察する。これを通じて、ソログープの作品における名の観念がヨーロッパ思想のどのような系譜に連なるのかを考察するとともに、名と一緒に現れる香りの意味について論じる。

2. 上記1.で提示したソログープの香りの表現を、フランスの詩人ボードレルの作品「万物照応」と比較する。これにより、香りをモチーフにすることの多い象徴派文学の中で、香りが担う働きのバリエーションと、両者に共通する思想的潮流について考察する。

(おおの ときこ、宇都宮大学)

【A15】1950年代の日本児童文学界におけるロシア翻  
訳児童文学 —ノーソフ作福井研介訳『ヴィーチャと  
学校友だち』を中心に—

南平 かおり

日本児童文学界における翻訳児童文学の歴史の中で、1950年代は注目すべき時期である。1950年に「岩波少年文庫」(岩波書店)と「世界名作全集」(講談社)がともに刊行され始めた。続いて「世界少年少女文学全集」(創元社、1953年刊行開始)や「少年少女世界文学全集」(講談社、1958年刊行開始)も出版され、1950年代は日本の翻訳児童文学において、翻訳者の翻訳に対する姿勢(完訳が絶対条件か否か)や作品の選定方針が活発に論じ始められた時代となる。

現在の翻訳児童文学を考える上でも、転換期となったこの1950年の翻訳状況を検討することは重要であり、これはロシア・ソ連の翻訳児童文学作品についても同様である。しかし、1950年代の翻訳児童文学を見渡す全体的な検討や欧米の翻訳作品研究は厚い層を成しているが、ロシア・ソ連の翻訳児童文学作品の翻訳事情についての個別の研究はまだほとんどなされていない。

本発表では、1954年に「岩波少年文庫」の一冊として刊行されたニコライ・ニコラエヴィチ・ノーソフ(Николай Николаевич Носов 1908-1976)の作品『ヴィーチャと学校ともだち(原題 Витя Малеев в школе и дома)』(福井研介訳)を一例として取り上げて、具体的に論じる。「岩波少年文庫」編集部は、その発刊にあたって児童文学作品の「翻訳」のあるべき姿を「定訳」に求め、明確な方向性を打ち出した。『ヴィーチャと学校ともだち』にもその主張が当然反映されているはずである。「岩波少年文庫」に起用されたロシア・ソ連の児童文学の翻訳者たちにも注目し、翻訳者に求められた「翻訳」の姿勢について検討する。

また、この作品がシリーズの一冊として選ばれたことの持つ意味やその影響(刊行後、教育界でもこの作品は注目された)についても明らかにしたい。

さらに、「岩波少年文庫」刊行当時の他社の全集などにみるロシア・ソ連の児童文学の翻訳作品の実相を捉え、ロシア・ソ連の児童文学がどのように日本の読者に提供され、受け止められていたのか、全体を見通すことも発表の目的である。

(なんぺい かおり、早稲田大学・津田塾大学)

【A16】ドストエフスキーにおける貨幣

平松 潤奈

ドストエフスキーの諸作品において、貨幣は、嫌悪の対象であり犯罪の元凶であるが、まさにそのことによってテキストを構造化する一つの中心をなしている。貨幣とは本来的には、超越性(価値という観念、信頼)を付与されていることによって商品交換に使用されるものだが、しかしドストエフスキーにおける貨幣は、非人格的な商品交換のなかで現れるのではなく、人格的な贈与交換において、プライド、憎しみ、愛情などの情動や信頼それ自体と交換されるものとして現れる。これは、本来、超越的次元で担われるべき信頼が、地上において人々のあいだを移動することを意味し、それによって人間どうしの秩序の不安定化(トラブル)がひき起こされる。人々の関係を秩序化する超越的次元が地上に降りてきているという事態は、神人たるキリストの再来(『カラマーゾフの兄弟』におけるキリストや『白痴』のムシキン公爵)と相通的であり、柄谷行人にしたがうならば、そのような超越的次元と経験的次元の交わる構造が、ドストエフスキーのテキストにおける他者との対話性(パフチン)を可能にしている。

そのような意味でのとりわけ対話的テキストがロシアに出現した背景には、近代世界システムの周縁に位置するロシアにおいて農奴解放が遅れたこと、農奴解放と商業社会が急に到来したこと、近代化に際してロシアが西欧諸国に多額の債務を負ったことなど、社会の経済的問題が考えられるだろう。システムを中心たる西欧で貨幣・資本主義が神にとってかわったのだとしたら、周縁国ロシアではそのような経済の超越化・抽象化がスムーズに行われなかった。そしてドストエフスキー自身、職業作家・雑誌経営者として多額の負債を抱えるなど、経済転換に支障をきたす社会の荒波に飲み込まれたことで、貨幣という存在に対する洞察を迫られたと言えるだろう。本報告においては、『賭博者』『カラマーゾフの兄弟』などにおける貨幣贈与のエピソードに焦点をあて、資本主義到来の時代に生まれたテキストを、新経済批評の観点から論じる。

(ひらまつ じゅんな、金沢大学)

【A17】『1890年チェーホフによるサハリン住民調査資料』における古儀式派住民と、チェーホフにおける古儀式派のイメージ

塚田 力

作家A.И.チェーホフが1890年にサハリン州を旅した際に作成し、後に大著『サハリン島』を執筆する際に利用した住民調査カードは、長らく一部の研究者にしか利用できなかったが、2005年に、『「私の数字でも、役立つことがあるかも知れない…」-1890年チェーホフによるサハリン住民調査資料』としてユジノ・サハリンスクで公開された。

これらのカードはチェーホフ自身により住民それぞれにつき作成され、当時のサハリン州の人口の過半について概括的に記述された貴重な歴史資料といえる。住民が信仰する教派についても項目があり、「古儀式派(スタロオブリャデツ)」あるいは「分離派(ラスコーリク)」と分類されている住民もいる。

サハリン州の古儀式派については中村喜和、H.ポターボヴァなどによる先行研究がある。また、チェーホフの住民調査資料を利用した研究としては、Л.И. Миссоноваによるものがあるが、古儀式派についての言及はわずかである。

本発表では『サハリン島』および『1890年チェーホフによるサハリン住民調査資料』に登場する古儀式派の信徒たちを概観し、1890年当時のサハリン島における古儀式派について統計的な面も含めて紹介したい。

また、チェーホフの作品には古儀式派信徒がしばしば登場する。そのイメージはC.C. ブイトコにより「19世紀末から20世紀初頭においてロシア社会で流通していた教派的なステレオタイプを全面的に反映している」と評価されているが、本発表ではサハリン島でチェーホフがどのような古儀式派信徒と出会ったのか、その後の作品において古儀式派信徒がどのような描かれたのかについても、関連を考察したい。

(つかだ つとむ、通訳業)

【B01】ロシア語における男性・女性のペアを成す人間を表す名詞をめぐって

光井 明日香

本発表では、ロシア語における男性・女性のペアを成す人間を表す名詞をいくつかの点から考察し、ふるまいの違いによって整理・分類することを目指す。Bobaljik and Zocca (2011)は英語、ドイツ語、ブラジルポルトガル語、スペイン語、ロシア語、ルーマニア語について省略(ellipsis)におけるふるまいによって男性・女性のペアを成す人間を表す名詞を3つのクラスに分類している。しかし、例えば非文であると指摘されていた *Марина москвичка и Иван тоже*。「マリーナはモスクワっ子で、イワンもそうだ」という文を母語話者に確認したところ適格であるとの回答を得るなど、Bobaljik and Zocca (2011)には考察の不十分な点が見られる。また Bobaljik and Zocca (2011)は提示した3つのクラスのうち1つについてはブラジルポルトガル語でしか考察をしておらず、ロシア語については *дежурный-дежурная*「当直者」のような形容詞型の名詞がこのクラスに入るであろうという予測を行っているのみである。

そこで本発表では、(a) 例えば *Она преподаватель*。「彼女は講師だ」のように女性を指示する時に「она(女性名) + 男性名詞」と言えるかどうか、(b) 例えば *преподаватели*「講師たち」には男性講師も女性講師も含まれるように、男性複数形が女性も指示対象に含めることができるかどうか、(c) *Иван москвич и Марина тоже*。「イワンはモスクワっ子で、マリーナもそうだ」のような文で、2回目に現れる相当する女性名詞を省略することができるかどうか、(d) *Марина москвичка и Иван тоже*。「マリーナはモスクワっ子で、イワンもそうだ」のような文で、2回目に現れる相当する男性名詞を省略することができるかどうか、という4点についてロシア語の男性・女性のペアを成す人間を表す名詞を考察し、Bobaljik and Zocca (2011)を見直し、新たな分類を試みた。その結果、Bobaljik and Zocca (2011)の分類にはふるまいの点から見ていくつかの修正が必要であり、またそこには中間段階という概念も導入することが必要であることがわかった。さらに Crockett (1976)はロシア語の当該の名詞をその語義に生物学的な自然性についての言及が含まれるものと含まれないものに分類しているが、今回の結果は「視点を変えると」それにも中間段階が存在するということを指摘するものでもある。これは、光井 (2014), (2015)において、ロシア語の名詞は文法性に関して男性と女性の間にも中間段階が見てとれると指摘したこととも矛盾しない。

(みつい あすか、東京外国語大学院生)

【B02】ロシア語と日本語における「動作の限界」の語彙（語形成）的表現・文法的表現

金子 百合子

日本語の動詞は英語の動詞と比較すると、動作の限界到達（あるいは“境界”）の意味を表しにくいことは多くの研究者が指摘している（池上 1981）。この言明は限界／境界の概念がアスペクチュアリティの機能意味野で意味的に優勢とされるロシア語に対しては一層当てはまる（Cf. Петрухина 2000）。日本語の動詞はアスペクト意味の補足的な限定がなければ、日本語のパーフェクティブ「スル形」がロシア語の完了体にも不完了体にも使われ得る。自明のことだが、両者の対応は解釈的なものにすぎない。したがってロシア語の完了体に対して日本語の「スル形」が用いられた場合、前者が表す強い完成性（сильная комплетивность – Князев 2007）は無標のアスペクト形式「スル形」のベールに包まれて弱まる。

だが、日本語には「～切る」という生産的な複合動詞型があり、終了限界の到達や動作の完全な終結を強調するために使われる。その際、「選手は泳ぎ切っていないし、コーチは教え切れていない。完成度は 2 割 5 分」（スポーツ報知 2016/05/20）のように、持続性を持つ過程や状態を表す先行動詞をとることが多い。最近では「タフさが要求されるゲームだったが、勝ちきったことに意味がある」（日刊スポーツ 2015/05/14）のように、本来、動詞の語彙意味に限界到達が見込まれている結果動詞からも複合動詞が作られる。ロシア語の場合、*выиграть* や *победить* に限界到達の意味をより強調することは語形成的には叶わない。

一方、限界／境界の概念が強く反映されたアスペクト体系を持つロシア語では、語形成法の潜在的能力が日本語とは逆のベクトル、動作の過程の取り上げに進むと考えられる例がある。例えば、「Он и не может быть иначе, так как это *побеждение* плоти духом и составляет сущность жизни」（Л.Н. Толстой）である。ロバーチンはこの文中の *побеждение* という造語について、トルストイはここで *побеждать* という動詞が意味する結果ではなくて、過程そのものを話題にしていると述べる（Лопатин 1973）。

限界性意識の強いロシア語と弱い日本語という立場から、文法アスペクトと語彙アスペクト、さらに各言語に備わる動詞語形成能力の潜在性について検討する。

（かねこ ゆりこ、神戸市外国語大学）

【B03】 Стихотворения как дидактический материал для постановки произношения и интонации у японских студентов

ЛАТЫШЕВА Светлана

В условиях, когда в программах преподавания русского языка в университетах Японии постановке правильного произношения и интонации отводится весьма незначительное время, перед преподавателями – носителями языка стоит задача уже на начальном этапе обучения найти методы быстрого и эффективного освоения японскими студентами чистого произношения звуков и звуко сочетаний русского языка, а также овладения различными интонационными конструкциями.

Один из методов – это заучивание небольших стихотворений. Однако выбрать стихотворения, которые помогли бы поставить правильное произношение и овладеть интонацией, вызывающей трудности именно у японских студентов, – задача весьма непростая. В результате отработки с учащимися значительного объема дидактического материала, автор смог выделить несколько стихотворений, которые позволяют эффективно решить проблему обучения произношению наиболее сложных для японских студентов звуков и их сочетаний, а также способствовать усвоению трудных интонационных конструкций.

В докладе на примере нескольких стихотворений анализируется дидактическая ценность каждого из них в плане освоения японскими студентами фонетических и интонационных трудностей русского языка, овладения правильной интонацией, развития способности воспринимать на слух и правильно выделять в потоке речи отдельные слова.

Хотя применение стихотворений в преподавании русского языка иностранным студентам является широко используемой методикой, весьма сложно найти такие стихотворения, в которых бы концентрировались именно те фонетические и интонационные явления, которые представляют сложности именно для японских студентов. Подбор таких стихотворений происходит на основе анализа данных о трудностях в произношении и интонации русского языка, которые испытывали учащиеся, и о типичных ошибках в произношении и интонации, характерных для японских студентов. Адаптация широко применяемого метода постановки произношения и интонации к конкретным проблемам студентов – носителей японского языка может представлять интерес для преподавателей и методистов, работающих с японской аудиторией.

（ラティシェヴァ スヴェトラーナ、上智大学）

【B04】パホーミイ・セルブ（ロゴフェート）直筆写本における言語的特徴に関して — 『ラドネシのセルギイ伝』を資料として—

丸山 由紀子

1430年代にアトス山からノヴゴロドに来た、セルビア出身の修道司祭パホーミイは中世ロシア期を通してもっとも多作な書き手の一人である。その半世紀にわたるルーシでの活動で、数十点もの宗教関連文書を執筆した。また修道院における宗教関連文書の筆写、ギリシア語文献の翻訳にも従事していた。

こうした活動の中でパホーミイが生み出した直筆写本は、現在もその一部が残されている。多くは既存の写本を書写したものだが、数は少ないものの、パホーミイ自身が著した聖者伝、祈祷文の直筆写本も現存する。その一つが『ラドネシのセルギイ伝』である。

今から10年ほど前、M.A.シバエフがロシア国立図書館(PHB)ノヴゴロド・ソフィアコレクションNo.1248の中に『ラドネシのセルギイ伝』のパホーミイ直筆写本を発見した(329-275葉)。パホーミイは1440年代初頭から1469年まで三位一体セルギイ大修道院に滞在した際、『セルギイ伝』執筆に取り組んでいた。M.A.シバエフの推定によれば、同写本は15世紀40年代、執筆の第3段階初期のものである。第65回大会で報告者は、同写本と、ルーシの修道士が作成した写本の言語的相違点について発表した。今回はパホーミイの直筆写本だけに焦点をあて、その言語的特徴をより詳しく検討する。

これまでパホーミイの言語に関しては、ルーシの修道士が筆写した写本に基づいて述べられてきた。パホーミイが他者の著作・写本を筆写した写本の言語的特徴については、M.N.スペランスキイ、最近ではS.エレシエヴィチの言及もある。ただ、パホーミイ自身の作品の写本については、S.エレシエヴィチがわずかに例を引用することはあったものの、一つの写本の言語を全面的に分析することはなされてこなかった。しかし、パホーミイの言語的特徴をよりクリアーに明らかにするにはこうした写本の分析も必須である。

報告ではセルビア語的要素とロシア語的要素が混在する同写本に関して、代表的な言語的特徴を概観し、セルビアにおいて12世紀後半に成立したラシュカ派正書法、14世紀後半に成立したレサフ派正書法などとの関係も考察する。その上で、パホーミイが15世紀ルーシの文字文化において果たした役割も考えてみたい。

近年、パホーミイの直筆写本と思われるものが相次いで発見されている。それらが確かにパホーミイの手によるものと特定する判断基準のひとつを提供するためにも、直筆写本の言語分析は極めて重要である。

(まるやま ゆきこ、東京外国語大学)

【B05】『アヴァクム自伝』におけるアクセント選択とその文体的役割について

青山 忠申

中世ロシア文学史において異彩を放つ『アヴァクム自伝』は、17世紀後半に北方の僻地プストゼルスクに幽閉されていたロシア正教会古儀式派の長司祭アヴァクムによって執筆された。この作品は、作者であるアヴァクムによって異なる時期に加筆修正された四つの版の系統に各々属する多数の写本が現在までに残されているが、幸いにもアヴァクムによる自筆写本が二種類現存しており、その筆跡を知ることが可能である。

この作品の大きな特徴は、それまでのロシアにおける書き言葉の伝統を打ち破り、口語体と文語体を巧みに織り込んだ文章で書かれていることである。その文章の鮮やかさは、ゴーリキー、ドストエフスキー、レオーノフ等、近現代の作家によっても高い評価を受けるところとなっている。

この作品において用いられる種々の言語形式の文体的なバリエーションに、作者アヴァクムの意図が反映されているということは想像に難くない。実際、語彙や語形のレベルでこの種の使い分けが存在することはこれまでに一度ならず言及されてきた。しかしながら、この作品に限らずアクセントと文体との関係が顧みられることは稀であり、これに関連した研究では、当該作品において実際のアクセント位置を示さないアクセント記号の使用が見られることがザリズニャークによって指摘されているに留まっている。本発表は、そこで指摘されているような『アヴァクム自伝』の不規則なアクセントに関して、それらのアクセントへの文体的価値の付与があるという考えに基づき、例外的アクセントの分類、および各々の担う文体的役割を明らかにすることを目的とする。

アヴァクム自身のアクセント選択を考察する上で、19世紀に書かれた『自伝』の転写本も参考になる。語順や語彙、語形等に関してアヴァクムの自筆写本を極めて忠実に再現しているこの転写本において、アクセントに関してもオリジナルを保持している例が大多数を占めることがこれまでの調査で明らかになっているが、一方でこの転写本には書き手の意識的なアクセント位置の変更も見られる。アヴァクムによって文体的効果を狙って用いられる例外的アクセントは、当然『自伝』の読者がその意図を汲み取ることが期待されていると考えられるため、転写本にどのように例外的アクセントが現れているかは重要である。

(あおやま ただのぶ、京都大学院生)

【B06】語の活用における出沒母音の交替の回避

渡部 直也

ロシア語をはじめ、スラヴ諸語全般において出沒母音（母音削除）が観察される。(1)に見るように、語根末の母音が、さらに母音が後続する場合に削除される（Gouskova 2012 など）。

(1) *день* ~ *дня*; *кусок* ~ *куса*; *шел* ~ *шла*

しかし(2)に示すように、後続する母音が出沒母音である場合、母音が削除されない。

(2) *денек* / \**днек* (~ *денька*); *кусочек* / \**кусчек* (~ *кусочка*); *вошел* / \**вшел* (~ *вошла*)

ср. *дневник*; *счет*; *в шесть*

仮に母音が削除されたとしても許容されない子音連続は生じないため、音韻的に説明ができない。

本稿では(2)のような現象について、出沒母音の後続そのものではなく、活用形間での統一性を保持することが要因であると主張する。(3)に見るように多くの活用形では後続している出沒母音が削除されるため、音韻的に先行する出沒母音は表出する。これらの活用形との統一性を保つため、後続する出沒母音を表出しても、先行する出沒母音は削除されないと考えられる。

(3) *денька*, *деньку*, *деньком*, *деньке*, ... → *денек*

本稿のアプローチの利点は、出沒母音が後続しても母音削除の生じる例外が説明できる点である。(4)に示す動詞(*сжечь*)の過去形では接頭辞の母音が表出しないが、これは不定形との統一性によって説明できる。不定形でも母音が表出する動詞(例：*войти*)と比較されたい。

(4) *сжег* / \**сожег* (~ *сжечь*)

ср. *вошел* / \**вшел* (~ *войти*)

以上のように、出沒母音の連続における削除の回避は、出沒母音そのものの特異性ではなく、形態音韻論的な原理によって説明ができるものである。

参考文献

Gouskova, Maria. 2012. Unexceptional segments. *Natural language and linguistic theory* 30. 79–133.

(わたべ なおや、東京大学院生)

【B07】ロシア語における y+生格と状況語中の *свой* との照応条件について

中野 悠希

ロシア語の再帰代名詞 *свой* は原則として主格と照応するが、与格や *для*+生格等、意味上の主体を表す斜格が先行詞となることもある。したがって領域・縄張り(「~のもとで」)を表す y+生格も *свой* と照応し得るが、その場合は例えば *У каждого свой вкус* 「それぞれに自分の(各自の、独自の)好みがある」のように、往々にして *свой* に付加的意味が伴う。このような *свой* は性質形容詞としての性格が強いと言え、事実先行研究の中には、純粋な代名詞としての *свой* が y+生格と共に照応することはないと主張するものもある。

しかし報告者のこれまでのコーパス調査及びインフォーマント調査で、*свой* が前置詞句ないしそれに相当する句として状況語(連用修飾語)を構成する場合には、*свой* は y+生格と照応し、かつ付加的意味を持たない純粋な代名詞として現れ得ることが分かっている。ただしその条件はかなり複雑である。例えば、複数のインフォーマントの意見として、(1)では *свой* は不適(原文でも人称代名詞 *его* が使用されている)だが、語順を操作した(2)では *свой* は適格であるという。

(1) *У профессора в придачу к его / \*своим познаниям тоже есть палочка.*

「教授は彼の／自分の知識に加えて、杖も一本持っている。」[Дино Буццати. Невероятное нашествие медведей на Сицилию. 2005]

(2) *В придачу к его / своим познаниям у профессора тоже есть палочка.*

ここから、*свой* は y+生格に先行する位置でのみ容認されるとの仮説が立てられる。ところが、このような語順の制約が見られない例、つまり *свой* と y+生格の位置関係にかかわらずインフォーマントによって *свой* の使用が容認される例も多数確認されているのである。

本報告では、このように複雑な様相を呈する y+生格と *свой* との照応現象を条件づけている要因を明らかにするため、考え得るさまざまな要因(語順のほか、*свой* の被修飾語の指示性、状況語の意味役割、また主体(y+生格)に対する話者の共感度等)を取り上げ、逐一コーパス調査・インフォーマント調査の結果を示しながら、考察と検証を行う。

(なかの ゆうき、京大大学院生)

## 【B08】ロシア語の呼びかけ語のポライトネス的用法

東出 朋

コミュニケーションを円滑に進めるためには、適切な呼びかけ語の選択に加え、適切な場面での使用が重要であることから、呼びかけ語は語用論、特にポライトネス研究の対象であると言える。ポライトネス理論とは、円滑な人間関係を築き維持するために行われる言語行動を研究する分野であり、Brown & Levinson (1984) (以下、B&L) が包括的な理論的枠組みを示している。B&L のポライトネスは様々な批判、議論を経て、現在では社会的慣習であるディサーメント (わきまえ) と話し手の意志的な選択であるストラテジー (方略) を統合したポライトネス研究が必要であるとされる (松村 2017)。

ロシア語の呼びかけ語は歴史的に多くの研究者の興味の対象であり膨大な先行研究が存在するものの、ロシア国内では認知度の低い B&L のポライトネス理論の観点からの研究は管見の限り見当たらない。

本稿の目的は、ロシア語の呼びかけ語がポライトネス・ストラテジーとしていかに用いられているか実例を基に観察し、そのダイナミックな用法を記述することである。具体的には、インタビュー番組と映画の文字化スクリプトをデータとして、(1)エチケット的な呼びかけ語、(2)依頼や非難等、聞き手のメンツを脅かす可能性 (Face Threatening Act) の高い発話行為に伴う呼びかけ語、そして(3)感情表出のための呼びかけ語の三種類を分析する。

ロシア語の呼びかけ語に特徴的な傾向として、まず FTA の高い場面、口論など対立関係の明らかな人間関係において、聞き手に対する説明の熱心さを伝え、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして利用されていることが分かった。また、冗談や愛情表現の場面において、接辞や愛称表現を利用して相手との親近感 (距離感) を積極的に調整しており、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとして利用されていることが分かった。

ロシア語の呼びかけ語は、特に談話中のダイナミックな発し方、つまり場面での選択が重要である。いかなる場面でも呼びかけ語がないことはそれ自体無礼にはならない。それにもかかわらず話し手は呼びかけ語によって聞き手への急激な接近 (approach-based politeness) を積極的に示す。呼びかけ語は当該発話場面に親密さを付加する効果を発揮し、緊張感を緩和し、円滑なコミュニケーション活動の遂行に資する材料となっている。

(ひがしで とも、九州大学院生)

## 【C01】大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスをめぐって

宮崎 衣澄

1907 年ロシアの皇室納入イコン画家ヴァシーリイ・グリヤールノフ (1867-1920) が制作した、日本ハリストス正教会大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスに焦点をあて、他のグリヤールノフ・イコンや、同時代の作例との比較を通して、大阪庇護聖堂のイコノスタスの特徴を明らかにすることを試みる。

大阪生神女庇護聖堂をはじめ、日本正教会が所蔵するロシア人イコン画家が制作したイコンに関する本格的な研究は、これまで日本でもロシアでもほとんど行われてこなかった。その最大の理由は、19-20 世紀ロシア・イコンは近年研究対象になった分野であり、研究の蓄積が少ないことにある。後期ロシア・イコンを代表するイコン画家 B.グリヤールノフも例外ではなく、彼に関する体系的な研究はロシアでも未だ行われていない。従って本報告は断片的に知られている工房に関する情報や、近年のロシア人研究者による研究を参照し、グリヤールノフ工房の歴史を明らかにした上で、大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスの位置づけを行う。

大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスは、次の点で独自性がある。第一に、イコノスタスが一度も修復されておらず、制作当時の完全な形で現存している点である。ロシアにはグリヤールノフ工房の完全なイコノスタスが残っている例はない。そのため大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスは、グリヤールノフ工房のイコノスタス・プログラムを知る大変貴重な作例である。

第二に、大阪生神女庇護聖堂イコノスタスのイコン様式に特徴がある。グリヤールノフ工房は「伝統様式」で知られる工房であり、それは工房がアンドレイ・ルブリョフのイコン「聖三位一体」をはじめ中世ロシア・イコンの修復を広く手掛けたことが示している。一方大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスは、伝統様式とは一線を画する。本報告では大阪生神女庇護聖堂のイコノスタスの様式決定の背景を詳細に検討し、モスクワの救世主キリスト聖堂をはじめとする同時代のイコノスタスとの比較・分析を通して、グリヤールノフ工房に関する新たな知見を示すことを目指す。

(みやざき いずみ、富山高等専門学校)

**【C02】現代ロシア正教会の霊的文献**

渡辺 圭

本研究は、報告者が 2016 年の 12 月 28 日から 2017 年の 1 月 6 日にかけて行ったモスクワでの短期資料調査に基づいている。調査の目的は修道院や聖堂における信者向けの啓蒙文献の渉猟および儀礼や聖職者の説教の参与観察であった。調査対象の修道院は、ザチャチエフスキ修道院、シモーノフ修道院、スレチェンスキ修道院、ダニーロフ修道院、ノヴォスパスキ修道院等である。

現在のロシア正教会では、聖堂や修道院に付属の売店において、信者向けに様々な啓蒙書が販売されている。ロシア語で霊的文献（духовные литературы）とも称されるこれらの啓蒙書は、信者の信仰心を深めるだけでなく、新たな信者の獲得も射程に入れている。ロシア正教会の啓蒙文献には流行り廃りもある。例えば、現在のロシア正教会を代表する評論家であった長輔祭アンドレイ・クラエフ（1963-）の著作は、彼が高位聖職者に批判的な言辞を弄したために修道院や教会付属の売店ではほとんど目にすることはなくなった。近年の傾向として注目すべきは、聖山アトスの人パイーシイ（1924 - 1994 年）の人気である。徳の高いこの修行僧については、大部の伝記がギリシャ語からロシア語に翻訳され、その生涯を描いた 6 枚組の DVD も発売された。

ロシア正教会の霊的文献の出版数は夥しいものであり、おそらく信者であろうとも全体像の把握は困難である。そのため、霊的文献の総体としてのイメージを描出するためには、特定のテーマに沿った収集、分析概念を用いた分析が必要とされる。報告者は、これら文献を「連続性」の概念を用いて整理する。報告者が用いる「連続性」の概念は、主に①時間の連続性②場所の連続性の二つに分けられる。時間の連続性とは、現在のロシアが天地創造から終末に至るまでの神の救済の営為（オイコノミア）の中にあることを示し、場所の連続性とは、パレスチナからビザンツ帝国に含まれていた地域、そしてロシアへという東方正教会の結びつきを指す。また、報告者は、いくつかのトボス（代表的断面）に分けて啓蒙書の解説を試みる（この手法は大貫隆のグノーシス研究（大貫隆『グノーシスの神話』2014 年）を参考にしたものである）。トボスの例としては、「聖者」、「教父学」、「長老制」、「イエスの祈り」等が挙げられる。本報告の目的は、ロシア正教会の戦略的啓蒙活動の一端を照射することにある。

（わたなべ けい、島根県立大学）

**【C03】 В поиске визуальной метафоры:**

Достоевский на языке балета и кино

БОБОРЫКИНА Татьяна

Текст Достоевского более, чем какой-либо другой полон не всегда видимых и опознаваемых шифров и кодов, он представляет целую «галактику означающих», смысл и «означаемые» которых должен найти каждый читатель, критик и интерпретатор. Чаще всего, поиск скрытых смыслов Достоевского лежит в области библейских аллюзий. Так фамилия Настасьи Филипповны — Барашкова — говорит о жертвенности красоты. Настойчиво повторяющееся число 4 и связанная с ним тема перекрестка — мотив жертвы и креста. Даже яичная скорлупа, которую среди мусора во сне и наяву видит Раскольников на лестнице, ведущей в полицию — это намек на Пасху, т.е. на возможность воскрешения мертвой души героя, после того, как он пройдет свой «крестный путь». От режиссеров и хореографов, обращающихся к Достоевскому, требуется не только прочтение «тайнописи» его произведений, но создание своего пластического и кино - текста, в котором главную роль играет, как правило, визуальная метафора.

Цель моего доклада — рассмотреть ряд переводов Достоевского на язык визуальных искусств. Я ставлю задачу анализа и сравнительного анализа фильмов российских и зарубежных режиссеров по таким произведениям, как «Белые ночи», «Преступление и наказание», «Идиот», «Двойник», а также балетов по повести «Белые ночи», по романам «Идиот» и «Братья Карамазовы» через призму создания и прочтения визуальной метафоры. Таким образом, исследование охватывает такие дисциплины, как литературоведение, искусствоведение, лингвистика балета и кино. Научная новизна такого подхода заключается в его мультидисциплинарности.

（ボボリキナ タチヤナ、  
Санкт・Петербург国立大学）

**【 C04 】 Виктор Виноградов об историчности «национализма» Пушкина в контексте новой культурной политики тридцатых годов**

**БЛИНОВ Евгений**

Работы Виктора Виноградова «Очерки по истории русского литературного языка» (1934) и «Язык Пушкина» (1935) на протяжении десятилетий использовались в качестве учебных пособий советскими филологами и лингвистами, а их автор занимал руководящие посты в советском языкознании в 50-е и 60-е годы, после знаменитой сталинской атаки на марризм. Тем не менее, их роль в формировании новой культурной политики 30-х годов, которую ряд исследователей характеризуют как сталинский «национал-большевизм», во многом недооценивается. В своем докладе я намерен показать, что «Язык Пушкина», завершенный в 1933-м и опубликованный в 1935-м году, обозначает идеологический, методологический и стилистический разрыв с предшествующей советской политикой «коренизации» и насаждения «пролетарской культуры». Описывая специфику «языковой политики» Пушкина и представляя его как фактического создателя «литературного языка русской нации», Виноградов проделывает работу, аналогичную той, чтобы была осуществлена Фердинандом Брюно в его монументальной «Истории французского языка». Как это ни парадоксально, подобная работа была проделана лингвистами и филологами, стоявшими у истоков формалистского движения (Е. Поливанов, Л. Якубинский) или близкими к нему в двадцатые годы (Г. Винокур, В. Виноградов). В своем докладе я также намерен показать ошибочность распространенного тезиса об аполитичности «формализма» в широком смысле и продемонстрировать на примере работы Виноградова важность «формальных» приемов для формирования сталинского политического нарратива «русской нации» 30-х годов.

(ブリノフ エフゲニー、  
ロシア科学アカデミー哲学研究所)

**【C05】 В. Ф. Одо́ефский 『ロシアの夜』と音楽思想**

**三浦 領哉**

報告者はこれまで、В. Ф. Одо́ефскийの音楽思想について、特に彼の哲学論文と音楽評論を通して研究を行ってきた。昨年の報告では、オド́ефскийの音楽思想における焦点の変化について考察を行った。初期の哲学論文では音楽思想と言うよりもむしろ音楽哲学、つまり「音楽とは何か」という問いが立てられ、それに対して思弁的に議論が展開されているのに対して、1820年代後半からはむしろ演奏会という具体的な音楽作品・演奏を通じて論じられた「音楽内容」の中に、「音楽の美とは何か、それはどのようにして達成されるのか」という音楽美学が姿を現すようになった。さらに1830年代後半からは、作曲家の作品とその作曲思想への評論を通じ「ロシアの芸術音楽とは何か」を問う議論を中心としながら、折に触れて音楽哲学の問題に触れるという形を取っている。このように「音楽一般の性質・本質」から「音楽美の本質」、そして「ロシア芸術音楽が具えるべき音楽美とは何か」へと、オド́ефскийの論点は遷移を遂げている。

しかし、ここでオド́ефскийの文学作品にも目を向ける必要がある。オド́ефскийの音楽思想が端的に表れているのが、連作小説『ロシアの夜』、とりわけ『ペーターヴェン最後の四重奏曲』『セバスチャン・バッハ』である。『ロシアの夜』は1844年に出版されたが、音楽と直接関わりをもつこれらの章はそれより以前の1830年から1835年にかけて書かれている。そして同時にこの時期のオド́ефскийは、哲学論文・音楽評論ともほとんど残していない。このことから、オド́ефскийの音楽思想における「形式と論点の変化」の中に、小説における創作が関わっていることが示唆される。すなわち前述の、「哲学論文における『音楽哲学』」から「音楽評論における『音楽美学』」に至る過程のちょうど中間に、「中編小説における『音楽思想』」が位置していたのではないかという推測が成立する。

本報告では、オド́ефскийの中編小説、とりわけ『ロシアの夜』を中心に、創作の背景から小説としての創作の中に表れる音楽思想に焦点を当て、オド́ефскийの音楽思想における「思索とその対象の連続性」について考察したい。

(みうら れいや、早稲田大学院生)

【C06】知られざるチャイコフスキイ：日記の未紹介  
ページから

一柳 富美子

本発表は、チャイコフスキイに関する最新情報とこれまで日本国内で見落とされてきた重要資料を音楽社会学的観点から紹介し、誰でも知っているチャイコフスキイの知られざる一面を明らかにする試みである。

2015年11月13日、ロシア芸術音楽の中で最も研究が進んでいると思われるチャイコフスキイの未完の歌劇《ウンディーナ》(1869)の5つの断片が世界初演された。この初演に至る一連の経緯は本年3月21日に国際音楽学会東京大会でクリンのチャイコフスキイ記念館学術研究員によって報告され、初演の音源も公開された。その一部はあの《白鳥の湖》でお馴染みの有名旋律だった。《ウンディーナ》が《白鳥の湖》の下書きになったことは情報としては周知されていたが、実際に音楽を聴くと大きな衝撃を受け、我々研究者にとっての未開地の広さを思い知った。(発表時に同音源公開予定)

他方、チャイコフスキイに関する日本語文献はロシア音楽の中で最も点数が多く、1985年以降に絞っても日本人の手による伝記的書き下ろしだけで8点以上ある。しかしどの文献も殆どソ連時代のロシア語資料と英語資料の孫引きのみで成立しており、過去10年に出版された文献でさえ不十分な内容のものばかりである。本発表では、まず2017年までのチャイコフスキイ日本語文献を総括し、その問題点の所在を明確にする。孫引き研究の産物の最たる例として第6交響曲“Пагетическая”の副題邦訳「悲愴」問題にも言及する。

次に、これまで日本では一部分しか紹介されなかった日記 П.И. Чайковский. Дневники 1873-1891 の全容を通じて、チャイコフスキイの人間性・音楽性の知られざる一面を明らかにする。「チャイコフスキイの日記」は1923年に出版され、没後100年に当たる1993年に復刻版が出た。年代別に全部で11部から成り、「何をして誰と会った」という通常の日記以外に、チャイコフスキイの個人的な嗜好や感想を記した随筆だけのページ(第8部)が存在する。ここでは特定の作曲家たちへの愛憎を赤裸々に吐露しており、ロシア音楽史全体にとっても極めて重要な資料と考えられる。最後に、国内未紹介文献 Неизвестный Чайковский (Юргенсон, М., 2012.) の中からチャイコフスキイの遺書などを紹介して、従来の評伝情報を補足する。

(ひとつやなぎ ふみこ、東京芸術大学)

【C07】19世紀末から20世紀初期のロシアにおける芸術メセナ——古儀式派の資本家と私立歌劇場

神竹 喜重子

本報告では、ロシアの古儀式派商人によるロシア音楽観と、彼らが経営していた歌劇場の活動について取り上げる。19世紀末から十月革命の1917年までの期間において、ロシアの古儀式派は、社会における革命的気運の高揚と共にその宗教的概念を大きく発展させ、さらに有力な資本家となった多くの古儀式派の商人階級が、芸術メセナとして活躍し、聴取文化に多大な影響を与えたほか、ロシアの芸術界のモダニズム運動の興隆に寄与した。この中で、古儀式派のメセナにおいて西欧から自立した「ロシア音楽」という概念が追求されていき、また古儀式派の経営していた私立歌劇場の上演活動のうえでそれが反映されていくこととなる。

本報告では、実際に、同時期のロシアにおいて古儀式派商人が芸術メセナの一環として経営していた私立歌劇場に焦点を当て、古儀式派商人がオペラ上演によりいかなる市民の啓蒙教育、また聴取文化を志向していたのか、さらにはいかなるロシア音楽文化を目指していたのかを、私立歌劇場における上演活動を分析するなかで明らかにする。より具体的には、①ロシア音楽の展望に関する古儀式派独自の美学的議論、②各古儀式派が経営していた私立歌劇場の上演データ、及び私立歌劇場の相互比較、という二つのテーマから、古儀式派の芸術メセナと私立歌劇場の上演の相関関係の分析に取り組む。そのようにすることにより、古儀式派の芸術メセナが、当時のロシア・オペラの動向、及びロシアの歌劇場の活動の中に、いかなる「ロシア性」を見出し、そのイメージを作り上げていったのかを論じる。そのうえで、改めて19世紀末から20世紀初期のロシアにおいて開花したモダニズム運動、つまり「銀の時代」に、ロシア音楽におけるナショナリズム論という視点から光を当ててことを目指す。

(かみたけ きえこ、北海道大学)

【C08】メディエーターとしてのニコライ・プーニン  
—十月革命後の芸術組織再編の中で

江村 公

2014年にサンクト・ペテルブルクで芸術祭〈マニフェスタ 10〉が開催されたことはまだ記憶に新しい。オランダで設立され、ヨーロッパで二年に一度開催されるこの祭典がロシアで初めて開かれたとき、現代アート作品と鑑賞者とのあいだに立つ「メディエーター」の重要性が強調されていた。ほぼ 100 年前、芸術批評家であったニコライ・プーニンの活動もまた、広い意味での「メディエーター」に当てはまるように思われる。

プーニンは、革命前から雑誌『アポロン』を中心に芸術批評活動を開始し、タトリンの第 3 インターナショナル記念塔について同時代に初めて本格的な論評を発表した人物である。大学や研究所で美術史を教えるとともに、ボルシェヴィキ政権での文化行政に積極的に関わり、ロシア美術館に現代アートを扱う「新潮流芸術」部門を設立した。また、詩人アンナ・アフマートヴァの長年の恋人として知られ、文学史にもその足跡を残している。

本発表は、十月革命後の芸術組織再編の中でプーニンが果たした役割に着目し、その活動を現代的な「メディエーション」の概念から捉え直すものである。「メディエーター」とは、元来、法的プロセスにおいて、対立する両者を調停する者を意味するが、現在の「アート・メディエーター」は作品に対する鑑賞者の理解促進、および作品をめぐる鑑賞者間の議論を調停し、整理する役割を担う。ここでは、「メディエーション」の「調停」「問題解決」という意義を踏まえ、おもに二つの観点からプーニンの活動を考察したい。まず、革命後の新しい美術館設立のために闘わされた多様な意見の集約と、その政策実行の際に彼の担った役割に注目する。革命後の美術館改変の議論には多くのアヴァンギャルド芸術家が参加していたが、プーニンは政策実行の際に、芸術家と政府の文化機関当局との調停者として振る舞った可能性がある。次に、ロシア美術館の業務や大学での講義を通じた、芸術の教育・普及活動という点である。芸術家ではなく、学芸員・教育者として、プーニンの考えた芸術のための場所とその在り方とは、どのようなものだったのだろうか。

このように、プーニンを「メディエーター」と位置づけることで、過去の美術史の遺産と当時の現代アートであったアヴァンギャルド作品の新しさとの調停、芸術作品と鑑賞者との関係性の再考といった彼の課題を明らかにし、その取り組みの先駆性を示唆する。

(えむら きみ、大阪市立大学)

【C09】ロシア国立芸術史研究所の活動と 1920 年代演劇

伊藤 愉

1920-30年代ロシア演劇における新しい文脈である「演劇学の構築」という試みを考察する。これは国立芸術史研究所の演劇部門（1920年に開設）を中心に形成されたレニングラード演劇学派の実践の一つである。演劇におけるレニングラード学派は、演劇学者 A. グヴォズジェフを代表として、芸術史研究所の演劇部門を中心に形成されたグループで、その考察対象に「戯曲」ではなく「上演」を据え、新しい演劇学の構築を目指していた。こうしたグヴォズジェフらの試みは、同じく考察対象をテキストから上演へと移行させたドイツ人演劇学者 M. ヘルマンの活動から強く影響を受けたものだった。

1920年代、グヴォズジェフらは、その態度に基づいて、世界演劇史の読み直しを図っていくことになる。この作業を通して、見世物小屋や東洋演劇などそれまであまり顧みられなかった対象が演劇史に学術的に組み込まれていった。見世物小屋や東洋演劇への関心は、同時代ロシアの演劇実践でも中心的役割を果たしたことはよく知られている。また、レニングラード学派の活動も、近年ではサンクトペテルブルグのロシア国立舞台芸術大学（旧演劇アカデミー）の H. ペソチンスキーらを中心に再評価が進んでいるが、レニングラード学派に関する概要の紹介にとどまっておき、彼らが同時代演劇をどのように評価していたのか、どのような視点から考察していたのか、具体的な分析はまだ十分にはなされていない。

例えば、1920年代には、レニングラード学派の研究者たちは、「伝統主義（トラディショニズム）」を主張し、メイエルホリドの活動を高く評価していた（C. モクリスキーの論文「伝統の再評価」（1926）など）。ここで彼らを使う「伝統」とは、文学作品としての「古典的伝統」ではなく、民衆演劇などを代表とする「上演形式としての伝統」だった。このようにレニングラード学派は、同時代の実験的な演劇動向を、単に過去を放擲する「新しさ」から評価するのではなく、歴史的な文脈を新たに形成し、その文脈のなかに位置付けることを狙っていた。

本発表では、こうした「演劇学の構築」という文脈を、同時代の言説、および演劇実践の動向と比較・相対化させながら、考察していく。

(いとう まさる、大阪大学)

【C10】ソ連建築界と近代主義建築における都市像の軌  
み：第四回近代建築国際会議（CIAM）モスクワ開催の  
頓挫理由究明に向けて

鈴木 佑也

本報告では 1933 年にモスクワで開催が予定されていた近代建築国際会議（通称 CIAM）によるソ連建築界と合同で企画した国際会議（第四回近代建築国際会議：最終的にはアテネに向かう船中で開催され、その成果は『アテネ憲章』として結実し、近代主義建築における都市像が提示された）が実現しなかった理由を、ソ連建築界と CIAM 側が都市に求めるものの齟齬を中心に、明らかにするものである。このモスクワでの国際会議は CIAM が当時提唱していた「機能的都市」を主題として、第一次五カ年計画との関連でソ連建築界で議論されていた「社会主義都市」に CIAM は「機能的都市」との類似性を見出し、またソ連建築界で劣勢に立たされつつあった近代主義建築を推奨するべく企画されたものであった。最終的にはソ連建築界側の「準備不足」として頓挫することになる。その理由は当時のソ連建築界における歴史主義建築の台頭とそれに反するかたちで近代主義建築の潮流が衰退したためと多く先行研究では指摘されている。確かに CIAM はその名の通り近代主義建築を各国で推進する国際建築家団体であり、その理念が拒絶されたとすれば、上記の国際会議を共同で開催することは困難で、暗礁に乗り上げたというはある程度合点が行く。しかしこの点はいくまで間接的要因であり、企画された会議の内容に触れてはいない。さらに都市に関する内容が主要な議題となっていた以上、この点を検証しなければ開催者相互の思惑やこの会議を通じて CIAM とソ連建築界それぞれが提示しようとした都市像が浮かび上がることはない。またこの点を見落として頓挫の原因をソ連建築界における近代主義建築の潮流が凋落したことに求めるのは短絡であろう。こうしたことから、本報告ではまずこの国際会議に至るまでのソ連建築界側の都市計画、特に十月革命以降からこの国際会議に至るまでに提案された首都モスクワの都市計画から彼らが求めていた都市像を把握する。この都市像と CIAM が提示した「機能的都市」との相違点または共通性を見出したのち、この国際会議開催に関与した最高国民経済会議（BCHX）もしくは全連邦対外文化協会（BOKC）のアーカイブ資料を用いて開催に向けた準備と頓挫までの経緯を明らかにする。こうしたことにより、モスクワでの第四回近代建築国際会議がソ連側の「準備不足」で頓挫したとする真の理由を究明できるであろう。

（すずき ゆうや、学振特別研究員／横浜国立大学）

【C11】聖アトス山ゾグラフィオス修道院文書庫の露和辞  
典について

恩田 義徳

ギリシア北東部エーゲ海に面したハルディニキ半島に位置する正教会の聖地、アトス山にあるゾグラフィオス修道院は、おおくの貴重な文書を所有していることで有名である。その文書庫には羊皮紙に書かれた聖書の断片や手書きの祈祷書、ビザンツ皇帝の書簡に混じっていくつかの日本語の資料が保管されている。その中の一つに手書きの露和辞典（語彙集）があるが、報告者らは 2016 年の夏に同修道院を訪れた際、それを目の当たりにする僥倖を得た。水色の罫線が引かれた洋紙に、ペンで、活字のように几帳面に文字が書かれていた。案内をしてくれた神父によると、どうやら宣教師ニコライに関係するものようであるが、詳しいことは「わからない」とのことであった。

ニコライは 1871 年函館に再到着した後、仙台藩の儒学者らとともに『魯和字典』（1872 年）を編纂したことが知られている。この辞典は露和字典の嚆矢とされ 1887 年に文部省から活字で出版された『露和字彙』まで本国における唯一の露和辞典であったという。1873 年ニコライが布教の拠点を東京に移すと、駿河台の露語学校でのロシア語教育が始まる。そこで学ぶ学生たちは字引を「写して」使う必要があったという。後にロシア語教育が東京外国語学校露語科に引き継がれてゆくと『P-Я 寿路和利 全』という手書きの辞典も伝えられた。この『寿路和利』については高野槌蔵氏が『露学事始』グレーボフ文法以前のニコライ傘下のロシア語学習略記（『ロシア語』Vol.1, No.2, 1963, pp2-6, ナウカ）に写真つきで紹介している。モノクロで、鮮明な写真とは言いがたいが、罫線が引かれた紙や、ペン書きの丁寧な文字は報告者がゾグラフィオス修道院で見たものと特徴が一致する。

（おんだ よしのり、東京外国語大学）

## 【C12】在外ロシア思想における経験の概念（ゲッセンとグールヴィチ）

林 由貴

報告者は亡命哲学者セルゲイ・ゲッセンにおけるロシア語の経験（переживание）の概念を、ロシア思想史においては彼との影響関係において併記されてきた亡命社会学者グールヴィチ（ジョルジュ・ギュルヴィチ）のフランス語の経験（expérience）概念と比較検討した。在外ロシア思想を西欧思想史の文脈から読み取ると同時に、在外ロシア思想史に西欧思想を位置づけるという双方向的な視野を開拓することが本研究の大きなねらいであるが、その基幹的部分に、これまで大まかにしか記述されてこなかった両者の思想の異同に関する議論を深める作業がある。

ロシア語の経験の概念（переживание）は、ゲッセンにおいては四つの理解に分類され、西欧哲学の限界を克服できるものと定義された。この経験とは、非合理的な諸価値の体験、神秘家としての生である。これは、グールヴィチが倫理の理論的研究の可能性を探求した 1937 年の著作において宗教的経験として分類される体験である。グールヴィチを純粋に西欧思想史において読むならば、彼の経験の概念（expérience）は、それ自体が語源的に問われたものではなく、変容を避けられない社会倫理（道徳）をいかに反復可能な科学的知として記述するかという問いの探求の道すがら、必然的に選び取られた概念であった。

グールヴィチは経験概念を使い、知性からは引き出されえない真実の感知、生きている人間の限界を超える体験の想起（死、永遠の生、絶対者）、ありのままの社会的生に関する省察を随所に張り巡らす。そこから、倫理（道徳）の科学とは剥き出しの現実から分離されたものであり、さらには感知された道徳的内容でもなく、構築された理性に他ならないという前提を打ち立てている。

こうして、非合理的価値体系に関する問題を亡命者グールヴィチがフランス語の経験概念によって精密に理論化し、分類したとすれば、ゲッセンはこれを 1910 年代にロシア語の概念（переживание）によって問題提起したものの、明確な結論には至らなかったのである。このように、経験概念の研究の系譜には、亡命ロシア知識人によるロシア/フランス思想史の接合、そしてゲッセンとグールヴィチの思想的連続性の根拠を見出すことができ、ゼンコーフスキイ神父の古典的な著『ロシア思想史』以降の在外ロシア思想史の記述方法については、露仏の経験概念を交差することにより、別の可能性が得られると考える。

(はやし ゆき、東京大学院生)

## 【C13】旧ソ連の記念碑における寓意的女性像：ロシア・南コーカサス・ウクライナの現状と比較考察

前田 しほ

報告者は社会主義体制が建立した記念碑についての現地調査を重ねている。というのも、20 世紀世界各地で受け入れられ、一種の近代化をもたらした社会主義体制は、そのイデオロギーの浸透の濃淡は分野によって大きく異なるが、モニュメンタルな都市構造は比較的広く受容されている。特に、壮大な記念碑は、体制を権威づける重要なメディアであった。それゆえ、体制崩壊時にはその象徴として記念碑が破壊されることもあったし、体制崩壊後は各地で記念碑の建て替えや移築が行われた。その際に残った記念碑もロシアとの関係悪化に伴い、撤去されるケースもある。他方で、経年劣化に伴う建て替えも進み、各地で消滅しつつある。記念碑は一度人々の記憶から消えると、どこに何があったのか、いつ撤去されたのか、わからなくなってしまう。そこで、社会主義の記念碑を一種の文化遺産とみなし、現在残る記念碑を調査し、記録に残す、また可能であれば、移築先を追跡するという現地調査を行っている。

今回は、ロシア、ウクライナ、アルメニア、グルジアにおける勝利の女神ニケを起源とする寓意的女性像のモニュメントの現状を報告するとともに、都市構造との関係性を比較考察する。その際、下記の二点に留意して論考を進める。第一に、なぜ、旧ソ連は独ソ戦後になって寓意的女性像を好んで建立したのか、という点だ。というのも、寓意的女性像は近代西欧で国家の代理表象として広く視覚化されてきた。ロシアでも帝政ロシアと二月革命政府は好んで用いた。しかし、10 月革命以降、独ソ戦の開始まで、寓意的女性像はほとんど用いられなかったのである。それが独ソ戦を契機に戦時ポスターに起用され、戦後記念碑として各地に建立される。第二に、体制崩壊後やその後のロシアとの関係悪化に伴い、ソ連や社会主義体制の覇権を顕彰する碑は、最初に撤去の対象となるにもかかわらず、寓意的女性像は、未だ健在であるケースが多い。それはいったいなぜなのか。また残ったといっても、現地でナショナル/ローカル・アイデンティティのシンボルとして根付いたケースもあれば、別の記念碑に象徴性を奪われ、二義的な地位に甘んじるケースもあり、地域によって、モニュメンタルな空間としての性質も異なる。複数の地域の比較によって、体制崩壊後の社会主義の記念碑の政治性とその変化を明らかにしたいと考えている。

(まえだ しほ、島根県立大学/人間文化研究機構)

**【P01】パネル ロシア・フォークロアの現在**

現 2017 年において、ロシア・フォークロアを巡る環境は転換期を迎えている。2016 年 9 月、ソ連崩壊後から四半世紀以上もフォークロアに関する活動および研究の全国的拠点であった、文化省傘下のモスクワのロシアフォークロアセンター(ГРЦРФ)の解体と再編が行われた。当センターは、(1)文化省文化戦略活動管理センター(ФДБУК «Роскультпроект»)傘下のロシアフォークロアセンター(ГРЦРФ)と、(2)Д.С.リハチョーフ記念文化自然遺産学術研究所(НИИ культурного и природного наследия)に再編され、双方ともに現時点での社会的文化的状況を強く反映した方針を掲げることとなり、この1年で新組織の運営・活動方針の検討・決定がなされてきている。

うち、現時点での社会的文化的状況をよりわかりやすく整理したセンターの活動方針によると、センターは2014年12月に大統領令として署名された「文化政策構想」を実現化すべく、「研究(исследование)」、「保存・保管(сохранение)」、「普及・振興(актуализация)」といった柱を基に戦略を立てている。その際、ロシア正教会との繋がりが強まり、異教や民間信仰の要素を排除しようとする伝統志向、純粋志向を今まで以上に前面に出すようになっている。

本セッションでは、現時点で色濃く出てきたこれらの諸要素の中から、特にフォークロアの保存と普及、および民間信仰の3点を取り上げ、ロシア・フォークロアの現在の状況についての報告、司会者を含めた質疑応答を経て、議論を行う。

司会：伊東一郎(早稲田大学)

**発表**

**1. 伝統文化の保存の新しい道：アクトゥアリザーツィヤという概念**

柚木かおり(関西外国語大学)

2016年9月以降のロシアフォークロアセンター(ГРЦРФ)の解体と再編についてまとめ、特に、普及・振興＝「アクトゥアリザーツィヤ(актуализация)」についての概念を検討し、事例を示す。また、これら国の文化政策とは別個に存在してきた事例を音楽分野から2つ紹介する。一つは「歌う民俗学者(поющий фольклорист)」といわれる1960年代以降の民俗音楽学者自身による主に声楽分野での活動、もう一つはインターネットの発達と経済の安定とともに2006年頃から起こり、現在発展を見ているアマチュアの主に器楽分野での活動である。これらにより、フォークロアの「普及・振興」が現在どのような状況にあるのかを描出することを試みる。

**2. フォークロア資料のアーカイブ化と公刊に関する今日の諸問題：ロシアと日本**

熊野谷葉子(慶應義塾大学)

ソ連・ロシアで蓄積されてきたフォークロア資料の現時点での公開状況と自分が作成を進めているフィールドワーク資料のデジタル・アーカイブについて報告する。現在、ロシアでは19世紀以来の膨大な口承文芸資料や民俗学関連資料の整理と公開が急速に進み、フォークロア研究の柱の一つとなっている。報告ではまず、こうして利用可能になった文献や音声・映像資料にどんなものがあり、どこでどのように公開されているかを紹介する。また、ロシア諸機関における調査資料の整理、記述、公開の方針と方法の特徴および問題点を検討し、それを踏まえて、熊野谷自身による北ロシアでのフィールドワーク資料のデジタル・アーカイブ化について、その特徴と進行状況を報告する予定である。

**3. 現代ロシアの民間信仰**

藤原潤子(神戸市外国語大学)

ソ連時代崩壊後のロシアでは、宗教リバイバルの流れの中で、呪い、邪視、予兆、超自然的存在への信仰など、いわゆる迷信的な民間信仰も活性化した。それに伴い、メディアを通じて広く活動する新タイプの呪術師も出現した。文化保存に重きを置く現地のフォークロア・民族学研究者にとって、こうした呪術師は「ニセモノ」であり、ほとんど研究対象となっていない。しかし彼らは新たな民間信仰を創造しつつ、メディアを通じてそれを拡散させており、現代の状況を考える上で欠かせない存在である。本発表では、ロシアで最も有名な呪術師 N. ステパーノヴァの著作を取り上げる。そこに大量に掲載されている読者の悩み相談の内容分析を通じて、現代ロシアの日常生活のどのような場面で民間信仰が出現するのかを明らかにしたい。

**【P02】 パネル Между источниками и списками:  
текстологические исследования средневековой  
славянской письменности**

В средневековую эпоху сохранение и распространение текстов обеспечивались их переписыванием. При этом в списках, восходящих к одному и тому же источнику, накапливались разночтения, различные по качеству и количеству. Цель данной панели состоит в том, чтобы обсудить разные аспекты вариативности в списках церковнославянских текстов, описать процессы и выявить причины расхождений списков и тем самым продемонстрировать значимость текстологического подхода для исследования средневековой славянской письменности.

**Модератор:**

**МИТАНИ Кэйко (Токийский университет)**

**Доклад 1**

**«Слово на побиение полей градом» в начальной истории славянского сборника 16 Слов Григория Богослова**

**МОЛДОВАН Александр (Институт русского языка им. В.В. Виноградова РАН)**

Древнейший славянский список гомилий Григория Богослова, датируемый XI в. («Слова (13) Григория Богослова»), содержит половину сборника 16 Слов Григория Богослова, составленного на славянской почве по образцу аналогичного византийского сборника X в. Перевод отдельных Слов в этом списке отражает хронологические и региональные различия в книжных традициях переводчиков.

Входящее в состав этого списка «Слово на побиение полей градом» представляет наиболее архаичные особенности языка. При этом текст Слова в этом списке весьма существенным образом отличается от его греческого прототипа, известного по дошедшим до нас греческим спискам.

Своеобразие древнейшего славянского текста «Слова на побиение полей градом» является результатом редакторской работы переводчика, переделавшего греческий текст в процессе его перевода.

Другие славянские списки этого Слова восходят к его повторному переводу, сделанному не позднее XIII в. по общеизвестному греческому тексту с использованием редких слов и гапаксов древнейшего перевода.

**Доклад 2**

**Новозаветные цитаты в «Сказании и страдании и похвале святым мученикам Борису и Глебу»**

**ХАТТОРИ Фумиаки (Киотский университет)**

«Сказание и страдание и похвала святым мученикам Борису и Глебу» (далее — Сс), само собой разумеется, является одним из важнейших и интереснейших произведений русской литературы. Борисо-Глебский цикл включает в себя Сс, Летописную повесть о Борисе и Глебе (далее — Лп), «Сказание о чудесах святых мучеников Христовых Романа и Давида» (далее — Сч), «Чтение о житии и погублении блаженных страстотерпцев Бориса и Глеба» *Нестора* (далее — Чт) и др. Самый ранний из дошедших до нас списков Сс — текст из Успенского сборника XII — XIII вв. В этом докладе проводится сравнение новозаветных цитат в текстах, большей частью, Сс из Успенского сборника с древнерусскими апракосами. Мы легко находим расхождения в переводах. На основании анализа таких примеров разночтений мы покажем одну часть взаимоотношений между компонентами Борисо-Глебского цикла.

**Доклад 3**

**Лингвистический и текстологический анализ славянских списков «Деяния Петра и Андрея в стране варваров»**

**МИТАНИ Кэйко (Токийский университет)**

Разнообразные повествования о путешествиях апостола Андрея, широко распространенные в Европе, были известны и в средневековой славянской письменности. Особой популярностью у славян пользовались два апокрифических сказания об Андрее, известные под названиями «Деяние апостолов Андрея и Матфея в городе антропофагов» и «Деяние апостолов Петра и Андрея в стране варваров».

О распространенности «Деяния Андрея и Матфея» в славянской письменности свидетельствуют многочисленные древнерусские и южнославянские списки этого памятника. Списков же славянского «Деяния Петра и Андрея», которое является, вероятно, продолжением «Деяния Андрея и Матфея», сохранилось весьма мало: два неполных русских списка и один целый в Хорватии, написанный хорватской глаголицей.

Доклад будет посвящен славянским спискам «Деяния Петра и Андрея». Будут приведены результаты анализа языковых особенностей русских и хорватского списков и

предложена реконструкция первоначального славянского перевода данного текста.

**【P03】 パネル Революционный импульс: искусство, наука, идеология**

Революционный импульс, заданный в 1917 году в России, отразился практически на всех сферах общественной жизни и продолжает оказывать свое влияние на процессы сегодняшнего дня. В данной секции планируется обсуждение тех изменений, которые революционные преобразования повлекли за собой в художественной, научной и идеологической сфере. На конкретных примерах демонстрируется характер и механизм трансформаций, которые революция имела как для отдельной личности, так и для целых областей человеческой деятельности. Цель секции состоит также в том, чтобы осмыслить значение революционных изменений из сегодняшней перспективы и показать, какие тенденции продолжают оставаться насущными в наши дни.

**Председатель:**

**КОМИЯ Митико (Университет Сэнсю)**

**Комментатор:**

**КОВТУН Наталья (Красноярский государственный педагогический университет)**

**Доклад 1**

**Противоречия и единство В. Розанова в революционные годы**

**НОНАКА Сусуму (Университет Сайтама)**

Во время Первой мировой войны Розанов придерживался идейной позиции консерватизма, суть которой состояла в своеобразном сочетании традиции славянофильства и восхваления «массового» патриотизма. Но в 1917 году Розанову, ставшему свидетелем двух революций, стало трудно придерживаться такой позиции. В течение двух лет до своей голодной смерти Розанов продолжал меняться в мысли так бурно и разнообразно, как никогда. Он возлагал надежды на Февральскую революцию «против всех своих прежних убеждений», даже назвав ее единственной в истории «христианской». Октябрьская же революция довела его до такого отчаяния, что в «Апокалипсисе нашего времени» он страстно обвинял христианство и самого Христа в «гибели» России. В докладе мы попытаемся охарактеризовать сущность его противоречивого и разностороннего мышления.

**Доклад 2**

**Наука под знаком идеологии: биологические утопии раннего советского периода**

**ГРЕЧКО Валерий (Университет Кобэ)**

Беспрецедентные эксперименты в области политической, экономической и социальной жизни, проводимые советским государством, захватывали и науку, стирая в ней границы между возможным и невозможным. Марксистское положение о том, что изменение экономического «базиса» приведет к изменению «надстройки», стало одним из главных векторов, задающих развитие во многих областях научного знания. В докладе рассматривается, какое влияние идеологические установки оказали на развитие советской науки. На примере биологических исследований показано, как приоритет идеологических ориентиров привел к отходу от стандартов научной этики и утопизму. С другой стороны, «утопизация» науки послужила источником интересного развития в области искусства. Это иллюстрируется на материале таких произведений, как фильм «Саламандра» (сценарий Луначарского), опера Шостаковича «Оранго» и др.

**Доклад 3**

**С. Третьяков revisited: в случаях В. Беньямина и Хито Штайерль**

**КИМ СуКван (Университет иностранных языков Ханкук)**

Революционный импульс является основной силой, приводящей к полной трансформации существующего мира. В то же время этот импульс характеризуется тем, что он никогда не исчерпывается лишь разовым событием, а постоянно возвращается в другие эпохи. Сергей Третьяков по-прежнему остается одной из самых многозначных фигур в истории русского авангарда. Его фактографическая программа особенно интересна в контексте очередной медиареволюции, переживаемой нашей эпохой. Актуальность наследия Третьякова состоит в том, что оно многократно возрождается самым интересным образом. В докладе мы рассмотрим интересные случаи такого «воскрешения» оригинальных идей Третьякова: тезис об «авторе как производителе» В. Беньямина и документальный фильм Хито Штайерль (Hito Steyerl) *In Free Fall*, основанный на идее «биографии вещи» Третьякова.

日本ロシア文学会活動記録 (2016~2017)

1. 2016 年度 (第 66 回) 大会

第 66 回大会 (定例総会・研究発表会) は 2016 年 10 月 22 日 (土)、23 日 (日) の両日、北海道大学で開催された。

10 月 22 日 (土)

午前 開会式、研究発表会

午後 理事会、研究発表会、大賞受賞記念講演、定例総会、懇親会

10 月 23 日 (日)

午前 研究発表会

午後 各種委員会、研究発表会

2. 研究発表会内容

研究発表

第 1 会場：W 棟 W203 講義室

10 月 22 日 (土) 午前 (ブロック①)

〔司会〕野中進、三好俊介

A01 安野直：エヴドキヤ・ナグロツカヤ『ディオニュソスの怒り』におけるジェンダーイメージ

A02 松本隆志：アンドレイ・ペールイ『洗礼を受けた中国人』における「私」の形象

10 月 22 日 (土) 午前 (ブロック⑤)

〔司会〕貝澤哉、毛利公美

A07 小椋彩：レーミゾフの虚実について (アーカイヴ調査をもとに)

A08 古宮路子：オレーシャ『羨望』におけるコミュニスト像の生成の問題

A09 澤直哉：「覆い」としてのことは：ウラジーミル・ナボコフ『ルージン・ディフェンス』におけるチェスと言語

10 月 22 日 (土) 午後 (ブロック⑨)

〔司会〕MITANI Кэйко

P01 УЖАНКОВ Александр, МИУРА Киёхару, ХАТТОРИ Фумиаки, MITANI Кэйко : Динамические аспекты средневековой славянской письменности: Текст, язык, образ повествования

10 月 23 日 (日) 午前 (ブロック⑬)

〔司会〕齋藤陽一、鈴木淳一

A13 田中沙季：Ф.М. Достоевский『罪と罰』のエピローグにおける語り手の問題

A14 樋口稲子：「大審問官」と『カラマーゾフの兄弟』における構成と構成要素

A15 斎須直人：ドストエフスキーの作品における若いニヒリストたちの精神的導き手について

10 月 23 日 (日) 午前 (ブロック⑰)

〔司会〕野中進、宮川絹代

A19 田子卓子：ミメシスとブーニンの作品 (1910 年代) における物語の作法

A20 古川哲：プラトノフ『秘められた人間』におけるロシア内戦期のロシア南部およびカフカスの表象について

10 月 23 日 (日) 午後 (ブロック㉑)

〔司会〕МОТИДЗУКИ Тэцуо

P03 МОТИДЗУКИ Тэцуо, ВЬЮГИН Валерий, ТЯН Хунминь, ЛИ Чжи Ен, КОСИНО Го : Трогать, видеть, слушать: новые подходы к новой литературе (на примере Маканина, Пригова и

Алексиевич)

第 2 会場：W 棟 5 番教室

10 月 22 日 (土) 午前 (ブロック②)

〔司会〕鳥山祐介、飯田梅子

A03 SIM Ji Eun : Эхо Пушкина в Корее: стихи «Если жизнь тебя обманет...» и парикмахерские картинки

A04 SNA Jhee Won : Два портрета: вопрос о моральности в искусстве

10 月 22 日 (土) 午前 (ブロック⑥)

〔司会〕乗松亨平、木村崇

A10 АЛЕКСАНДРОВ Александр : Роль медиа в появлении первых музеев им. Л.Н. Толстого: японские материалы в Толстовском музее в Петербурге

A11 АЛЕКСАНДРОВА Эльмира : Отблески Андрея Белого в портретах некоторых персонажей Газданова

A12 HSIUNG Tsung-huei : Чужие слова как коллаж из «следов» культурной памяти: О художественном методе в «Поэме без героя» Анны Ахматовой

10 月 22 日 (土) 午後 (ブロック⑩)

〔司会〕鈴木佑也

P02 神岡理恵子、生熊源一、河村彩、鈴木佑也：モスクワ・コンセプチュアリズム：活動とその理論化の「はじまり」を再考する

10 月 23 日 (日) 午前 (ブロック⑭)

〔司会〕中村唯史、武田昭文

A16 PARK Sun Yung : Собор и музей: о концепции культуры О. Мандельштама и А. Сокурова

A17 АКИМОВА Анна : О выборе основного источника первой книги романа А.Н. Толстого «Петр Первый»

A18 ВЬЮГИН Валерий : Советские кино/литературные репрезентации шпионажа в конспирологической перспективе

10 月 23 日 (日) 午前 (ブロック⑱)

〔司会〕長谷川章、越野剛

A21 金沢友緒：近代ロシア文学における「気球」

A22 坂中紀夫：ニコライ・シパーノフとソ連初の私立探偵のイメージ

10 月 23 日 (日) 午後 (ブロック㉒)

〔司会〕中村唯史

P04 中村唯史、奈倉有里、大平陽一、武田昭文、梅津紀雄、八木君人：20 世紀前半のロシア文化における自叙の問題

第 3 会場：W 棟 6 番教室

10 月 22 日 (土) 午前 (ブロック③)

〔司会〕秋山真一、堤正典

B01 光井明日香：ロシア語の性に関するいわゆる意味的一致における素性のあり方をめぐって

B02 中野悠希：ロシア語の斜格形と再帰代名詞との照応に関する「主体」の影響について

10 月 22 日 (土) 午前 (ブロック⑦)

〔司会〕柳町裕子、黒岩幸子

B03 福安佳子：『エウゲーニー・オネーギン』における「судьба」及びその類義語の日本語訳について

B04 有信優子：露日語の訳出行為におけるシフトの分析—Павел Санаев 著 «Похороните меня за плинтусом» の翻訳実践報告

B05 佐山豪太：放射状カテゴリーを用いた語彙力の増加—応用・認知言語学的な観点からの接頭辞 про-

の分析について

- 10月22日(土)午後(ブロック⑩)  
〔司会〕浦井康男、堤正典
- B06 КАТО Юрий, АБЫЯКАЯ Олеся: Ошибки японцев в речи на русском языке
- B07 山田久就: SCORM 形式の小テストの作成について
- B08 清沢紫織: 現代標準ベラルーシ語の2つの規範をめぐって
- 10月23日(日)午前(ブロック⑪)  
〔司会〕岡本崇男、岩原宏子
- B09 宮内拓也: ロシア語における関係節の統語構造: 束縛現象からの考察
- B10 世利彰規: ロシア語統語研究のためのイントネーションの上昇・下降のモデル化
- B11 後藤雄介: ロシア語における民族形容詞の統語的特徴をめぐって
- 10月23日(日)午前(ブロック⑫)  
〔司会〕服部文昭、秋山真一
- B12 恒任翔吾: 不完了体一般的事実の意味とアクションナルな意味—поэтому что が用いられた構文を例に
- B13 恩田義徳: OR における述語的用法の分詞と述語動詞の関係について
- 10月23日(日)午後(ブロック⑬)  
〔司会〕坂庭淳史、中野幸男
- A24 ЖДАНОВ Владимир, 鈴木淳一: Открытие М. Булгакова и О. Мандельштама в СССР
- A25 梅村博昭: P.C.カーツ『ソ連 SF 史』の文学的意義と余波
- 第4会場: W棟 W202 講義室
- 10月22日(土)午前(ブロック⑭)  
〔司会〕岩本和久、八木君人
- A05 関岳彦: ヨシフ・プロツキーにおける彫像
- A06 小澤裕之: 魔法使いの弟子: ハルムス作品における未来派の形象
- 10月22日(土)午前(ブロック⑮)  
〔司会〕村田真一、塚崎今日子
- C01 山口涼子: ロシアの恋愛の魔術における「両親の拒絶」というモチーフ
- C02 細川瑠璃: フロレンスキイの数
- C03 内田健介: スタニスラフスキー・システムのポドテキスト
- 10月22日(土)午後(ブロック⑯)  
〔司会〕伊東一郎、高橋健一郎
- C04 村山久美子: マリウス・プティパのバレエの実像
- C05 三浦領哉: 初期「グリーンカ期」におけるオドーフスキーの音楽思想—作曲家グリーンカとの関わりをめぐって
- C06 神竹喜重子: モノ・オペラ《アンネの日記》—ナチス時代の少女を描く「現代音楽」
- 10月23日(日)午前(ブロック⑰)  
〔司会〕中澤敦夫、望月哲男
- C07 畔柳千明: イアキンフ・ビチューリンと中国文化
- C08 塚田力: シャベリスキー - ボルクの歴史物語『預言修道士』をめぐって
- 10月23日(日)午前(ブロック⑱)  
〔司会〕北見諭、宇佐美森吉
- C09 宮崎衣澄: 東京復活大聖堂(ニコライ堂)のイコノスタシス・プログラムをめぐって
- C10 渡辺圭: 府主教アントニイ・フラボヴィツキイの

讃名派駁論: 「心理主義」の宗教思想

### 第3回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10月22日(土)15:50-16:50 W棟W203 講義室  
諒早勇一: 意外性、そして偶然性—ロシアへの道—

### 3. 総会議事録要旨

〔議長団: 岩原宏子氏(北海道)、長谷川章氏(東北)、古宮路子氏(関東)〕

(1) 望月会長より開会の辞

(2) 第13回日本ロシア文学会賞表彰

本年度の学会賞を大野斉子氏(著書部門)、竹内ナターシャ氏(論文部門)に決定したことが大石学会賞選考委員長により報告され、望月会長によって賞状授与が行われた。

(3) 議長団選出

(4) 会務報告

事務局より会員異動(2015年10月~2016年9月)について報告があり承認された。また賛助会費(7社)、維持会費の納入(17名)について資料に沿って報告された。

(5) 各種委員会報告

各委員長により今年度の活動の報告が行われた。

(6) 2015/2016年度決算および会計監査報告

事務局より2015/2016年度決算案について資料に沿って説明があり、拍手で承認された。

(7) 2016/2017年度予算案について

事務局より2016/2017年度の予算案が資料に沿って説明され、拍手で承認された。

(8) 2017年度大会について

2017年度大会は上智大学で行われることが事務局から報告された後、担当校の井上幸義氏より挨拶があった。

(9) 新事務局、新役員および新委員について

望月会長より資料に沿って新事務局、新役員、新委員が紹介された後、拍手で承認された。

(10) その他

### 4. 会員異動(2016年10月~2017年7月)並びに賛助会費・維持会費納入者(敬称略)

#### ご逝去

生森将人(関西) 柿沼伸明(関西)

#### 入会者

青山忠申(関西) 神竹喜重子(関東) ムヒナ・ヴァルヴァラ(関東) 東出朋(西日本) エヴゲーニー・ブリノフ(関東) 堀江広行(関東) 渡部直也(関東)

#### 退会者

飯島康夫(関東) 白倉克文(関東) 清水道子(関東) カザケーヴィチ・ヴァチェスラフ(中部) 東シャトヒナ・ガンナ(関東) 高木美菜子(関東) 矢沢英一(関東)

#### 賛助会費納入者

国際親善交流センター(JIC)、新潮社、成文社、ナウカ・ジャパン、ナウカ出版、日本ロシア語情報図書館、白水社、ロシア旅行社

#### 維持会費納入者

井上幸義、宇多文雄、浦井康男、木村崇、栗原成郎、佐藤純一(2口)、佐藤靖彦、鈴木淳一、中村泰朗、中本信幸、前田和泉(2口)、三谷恵子、望月恒子、望月哲男(2口)、矢沢英一、山田勇(2口)、山田吉二郎

## 日本ロシア文学会

2015/2016 会計年度決算報告 (2015 年 9 月 1 日～2016 年 8 月 31 日)

2016/2017 会計年度予算案 (2016 年 9 月 1 日～2017 年 8 月 31 日)

(2016 年 10 月 22 日総会承認)

## I 一般会計

| 収入の部      | 2015/2016 年度予算 | 2015/2016 年度決算 | 2016/2017 年度予算 | 備考        |
|-----------|----------------|----------------|----------------|-----------|
| 前年度からの繰越金 | 4,619,801      | 4,619,801      | 3,788,794      |           |
| 利息        | 500            | 162            | 100            | 前年度実績     |
| 学会費       | 3,200,000      | 2,150,000      | 3,200,000      |           |
| 入会金       | 9,000          | 4,000          | 4,000          | 前年度実績     |
| 賛助会費      | 60,000         | 70,000         | 62,000         | 過去 4 年間平均 |
| 雑収入       | 1,000          | 0              | 1,000          | 過去 4 年間平均 |
| 特別収入      | 0              | 0              | 0              |           |
| 合計        | 7,890,301      | 6,843,963      | 7,055,894      |           |

| 支出の部      | 2015/2016 年度予算 | 2015/2016 年度決算 | 2016/2017 年度予算 | 備考                    |
|-----------|----------------|----------------|----------------|-----------------------|
| 大会準備費     | 400,000        | 119,797        | 400,000        | 北海道大学                 |
| 学会誌制作費    | 798,012        | 798,012        | 676,242        | 本年度請求額                |
| 交通費       | 1,030,000      | 1,073,980      | 1,008,000      | 過去 4 年間平均             |
| 事務委託料     | 300,000        | 0              | 300,000        | 学会事務代行                |
| 事務費       | 200,000        | 67,550         | 200,000        | 謝礼(編集・広報)、文具費、理事会補助など |
| 広報委員会     | 15,428         | 15,428         | 15,428         | レンタルサーバー代(前年度実績)      |
| マブリヤール会費  | 25,000         | 21,406         | 21,000         | 200 ドル                |
| JCREES 会費 | 30,000         | 60,000         | 30,000         | 例年実績                  |
| 学会賞       | 100,000        | 100,000        | 100,000        | 例年実績                  |
| 通信費       | 250,000        | 199,439        | 400,000        | 前年度実績                 |
| 印刷費       | 400,000        | 113,858        | 400,000        | 大会資料集、名簿含む            |
| 会合費       | 9,000          | 5,699          | 7,000          | 過去 4 年間平均             |
| 事業費       | 100,000        | 30,000         | 100,000        |                       |
| 特別会計に振替   | 500,000        | 450,000        | 0              |                       |
| (小計)      | 4,157,440      | 3,055,169      | 3,657,670      |                       |
| 予備費       | 3,732,861      | 0              | 3,398,224      |                       |
| 次年度への繰越金  | 0              | 3,788,794      | 0              |                       |
| 合計        | 7,890,301      | 6,843,963      | 7,055,894      |                       |

## II 特別会計

| 収入の部      | 2015/2016 年度予算 | 2015/2016 年度決算 | 2016/2017 年度予算 | 備考 |
|-----------|----------------|----------------|----------------|----|
| 振替(一般会計)  | 500,000        | 450,000        | 0              |    |
| 前年度からの繰越金 | 2,504,018      | 2,504,018      | 2,946,123      |    |
| 維持会費      | 200,000        | 135,000        | 135,000        |    |
| 利息        | 600            | 585            | 600            |    |
| 合計        | 3,204,618      | 3,089,603      | 3,081,723      |    |

| 支出の部      | 2015/2016 年度予算 | 2015/2016 年度決算 | 2016/2017 年度予算 | 備考        |
|-----------|----------------|----------------|----------------|-----------|
| 学会費補助     | 36,000         | 0              | 30,000         | 過去 4 年間実績 |
| 事業費       | 250,000        | 56,000         | 200,000        | 国際交流助成制度  |
| 学会参加者旅費援助 | 87,480         | 87,480         | 340,000        | 本年度請求額    |
| (小計)      | 373,480        | 143,480        | 570,000        |           |
| 予備費       | 2,831,138      | 0              | 2,511,723      |           |
| 次年度への繰越金  | 0              | 2,946,123      | 0              |           |
| 合計        | 3,204,618      | 3,089,603      | 3,081,723      |           |

(2016 年 10 月 12 日、21 日監査報告 監事：諫早勇一、寒河江光徳)

## 委員会活動記録

### ■日本ロシア文学会大賞選考委員会

沼野 充義

今回で第 4 回になる日本ロシア文学会大賞は、推薦を 2016 年 10 月から受け付け、実施細則に基づき 2016 年 12 月 31 日に締め切ったところ、計 3 件の推薦があり、それを受けて 2017 年 4 月 23 日に東京大学文学部現代文芸論研究室において選考委員会を開催し、全会一致で桑野隆氏（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）を大賞候補者として推挙することに決定した。この選考結果は 7 月 23 日（日）の理事会で報告され、正式に承認された。

授賞の主な理由は、桑野氏が（1）長年にわたり、言語学・詩学・芸術研究の領域で先駆的な著作を次々に世に問い、ロシア・フォルマリズム、文化記号論、パフチン、ロシア・アヴァンギャルドなどの研究を一貫して主導してきたこと、（2）優れたロシア語教科書を執筆し、我が国のロシア語教育に貢献したこと、（3）大学の授業や研究会を通じて、多くの学生を薫陶し、ロシア語ロシア文化研究者を育ててきたこと、である。選考結果報告の全文は、『ロシア語ロシア文学』49 号に掲載されている。

### ■学会賞選考委員会

大石 雅彦

学会賞選考委員会は 2017 年 1 月から 6 月にかけて選考作業を行った。6 月 10 日に選考委員会が開催され、審査・選考の結果、論文では高橋知之「反省と漂泊：アポロン・グリゴリーエフの初期散文作品について」（『ロシア語ロシア文学研究』第 48 号掲載）、伊藤愉「現実を解剖せよー討論劇『子どもが欲しい』再考」（『メイエルホリドとブレヒトの演劇』玉川大学出版部、2016 年所収）が受賞作に決定した。著書については、該当作無しという結論になった。詳しくは『ロシア語ロシア文学研究』第 49 号をご参照ください。

### ■学会誌編集委員会

大平 陽一

会誌『ロシア語ロシア文学研究』第 50 号への投稿エントリーは、例年通り、11 月末日が締め切りです。ご応募をお待ちしております。

この報告をお読みになる頃には、すでに会誌がお手許に届いているでしょうから、お気づきの方もいらっしゃると思いますが、49 号から注の形式を文末注から脚注に変更いたしました。

末筆ながら、49 号の査読にあたって下さいました会員諸氏に篤く御礼申し上げます。

### ■広報委員会

古賀 義顕

広報委員会では引き続き学会ホームページ（HP）の管理・運営を行ない、学会員への情報提供に努めている。「学会からのお知らせ」、「学会関連その他の催し（カレンダー）」、「公募・外部イベント情報」、「ロシア関連一般書籍」を中心として、直近 1 年間の更新件数は約 70 件。会員各位にも情報提供を継続的に呼びかけていく。委員会では、バナー作成その他の都合上、情報の掲載依頼から掲載に至るまでに時間を要することが間々あるため、HP 運営の外部委託を検討していくこと、および学会賞、学会大賞

の授与式の記録および HP での公開に際して、学会賞選考委員会、学会大賞選考委員会、大会運営委員会とも連携していくこと、等が確認された。

### ■国際交流委員会

前田 和泉

1. 2017 年 5 月 30 日を締切として、「国際学会等での報告に関する助成」と「公開研究会・（ミニ）シンポジウム等の実施に関する助成」の申請を募集し、委員会の審議を経て、前者 1 件、後者 0 件を理事会で採択した。助成該当者による国際学会の報告・印象記は、学会ホームページに掲載予定。なお、来年度も本制度への助成金として予算 20 万円が理事会にて承認された。

2. 2015 年度全国大会で試行され、2016 年度全国大会より正式に採用された「国際参加枠」を今年度も継続。2017 年度全国大会には 7 名のエントリーがあり、理事会での審議の結果、5 名が承認された。

3. 海外で開かれる国際会議・シンポジウム・セミナー等の情報を、広報委員会の協力を得ながら、学会ホームページに随時掲載している。引き続き学会員には、定期的に学会ホームページを閲覧されるとともに、国際会議などの情報があれば、国際交流委員会もしくは広報委員会までお知らせ願いたい。

### ■ロシア語教育委員会

柳町 裕子

2016 年 12 月 11 日に慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて日本ロシア語教育研究会と共催で海外からロシア語教育専門家を招いてロシア語教育研究集会を開催した。今後も当研究会と連携ながら活動する予定である。

## 支部活動記録

### ■北海道支部

2017（平成 29）年度日本ロシア文学会北海道支部支部会（運営委員会、研究発表会、総会）：2017 年 7 月 8 日 北海道大学、人文・社会科学総合教育研究棟 W408 号室

◇運営委員会：平成 28 年度活動報告、会計報告、役員改選、その他。

◇研究発表会

上村正之（北大院）『「タラス・ブーリバ」の 1835 年版と 1842 年版：ザポロージェ・コサックの「ロシア化」の問題について』司会：大西郁夫

神竹喜重子（スラブ・ユーラシア研究センター）「19 世紀末から 20 世紀初期におけるロシア古儀式派商人の芸術メセナについて」司会：鬼内勇津流

大武由紀子（北大院）「アヴァンギャルドデザイナー・G. クルーツィスについてー社会主義リアリズムとフォトモンタージュ：資料 MOCCX（モスクワ地区芸術家連盟）からー」司会：宇佐見森吉

斎藤慶子（スラブ・ユーラシア研究センター）「バレエ『まりも』（1962 年）と社会主義リアリズム：アイヌにまつわる創作 伝説のソヴィエト・バレエ化」司会：高橋健一郎

◇特別講演

Михаил Сулов（スラブ・ユーラシア研究センター）  
«Интерпретация русскоязычной утопической литературы: Постсоветский период» 司会：越野剛

◇総会

- 1.平成 28 年度活動報告（理事会および北海道支部）
- 2.平成 28 年度会計報告
- 3.役員改選
- 4.その他

支部長：寺田吉孝

事務局担当：大西郁夫

住所：060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目 北海道大学文学研究科 大西研究室気付

Tel:011-706-4090 Mail:ions@let.hokudai.ac.jp

■東北支部

2017 年度総会・研究発表会

2017 年 7 月 8 日（土）東北大学川内北キャンパス

研究発表会

長谷川章 チェブラーシカはなぜ悲しげなのか ソ連崩壊以降のソビエト・アニメーション解釈を読み直す  
木村崇 C.C.ウヴァーロフの「Триединая формула」とは何だったのか

総会

- ① 役員改選など
- ② 2016 年度会計報告

支部長：長谷川章

事務局担当：川辺博

住所：〒981-3213 仙台市泉区南中山 5-5-2

聖和学園短期大学 川辺研究室気付

電話 022-376-8270 (川辺直通)

ファクス 022-376-3155 (共用)

E-mail kawabe@seiwa.ac.jp

■関東支部

- 1.『関東支部報』34 号発行  
2016 年 10 月 15 日
- 2.『関東支部報』35 号発行  
2017 年 5 月（本号から支部報はデジタル媒体でのみ作成・公開し、研究発表会の予稿集を兼ねることとなった）
3. 2017 年度研究発表会

2016 年 6 月 10 日（土）早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 681 教室

◇研究発表

石井優貴（東大院）ショスタコーヴィチの創作におけるジャンルの問題：公的評価に対する「明確な」回答としての作品群（司会：梅津紀雄）

大崎果歩（東大院）「トルストイによる福音書」—ロシア正教会宗務院訳聖書との比較分析（司会：渡辺圭）

福井祐生（東大院）血の繋がった「私」はもうひとりの「私」である：フォードロフ思想における他者の尊重（司会：大須賀史和）

小俣智史（早大博士課程修了）ニコライ・フォードロフにおける技術の思想（司会：大須賀史和）

佐藤貴之（東外大博士課程修了）同伴者作家 B・ペリニャーク作品の革命表象に関する研究—文明の黄昏に咲い

たロシア文化の花（司会：大石雅彦）

梶山祐治（東大博士課程修了）ボリス・パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモチーフの構造研究（司会：前田和泉）

鈴木佑也（東外大博士課程修了）存在しない建築物の物語からの脱却：建築プロジェクト・ソヴィエト宮殿の実現可能性と頓挫に関する検証（司会：桑野隆）

恩田義徳（東外大博士課程修了）文献学とコーパス—古代教会スラブ語の福音書パラレルテキスト作成を通して（司会：三谷恵子）

4. 運営委員会

2017 年 4 月 1 日（土）に早稲田大学（戸山キャンパス）にて開催し、今期の支部運営体制や研究発表会等について検討した。

5. 2017 年度第 1 回総会

2016 年 6 月 10 日（土）早稲田大学（2016 年度日本ロシア文学会関東支部研究発表会の会場で開催）：

- ① 報告事項 2015.10.1-2017.3.31 会計報告、活動報告
- ② 審議事項 支部規約の改正（第 20 条）、支部規約に関わる規定の改正（第 5 項）、関東支部選出理事候補選挙について

6. 今期の体制

野中前事務局長の全国学会事務局長就任を受け、任期途中ではあるが事務局を交代することとなった。

支部長 伊東一郎

事務局長 乗松亨平

事務局住所 〒153-8902 目黒区駒場 3-8-1

東京大学駒場キャンパス 18 号館 乗松亨平研究室

(knorimatsu@nifty.com)

■中部支部

2017 年度総会・研究発表会

2017 年 7 月 8 日 於 中京大学名古屋キャンパス

研究発表

Татьяна Сасенко Интенсивный курс РКИ: чему мы можем научить при дефиците учебных часов.

郡 伸哉 クプリーン『オレーシャ』について——森の役割の視点から

総会

- ① 2016 年度活動報告
- ② 2016 年度会計報告
- ③ 次期役員選出
- ④ 2017 年度活動案

支部長・事務局長：杉本一直

事務局住所：〒464-8671 名古屋市中種区桜が丘 23

愛知淑徳大学 交流文化学部 大学院 GCC 研究科

杉本一直研究室気付

■関西支部

1. 秋季研究発表会・総会

2016 年 12 月 3 日（土）天理大学

◇研究発表

大平陽一〔天理大学〕タイゲのブックデザインにおける構成主義（司会：田中大）

杉野ゆり〔桃山学院大学〕プーシキン『青銅の騎士』における鷲の形象の不在：ダンテ『神曲』との比較研究の視点から（司会：榎本真奈美）

江村公〔大阪市立大学〕記憶の場とその書き換えの試み：ロシア・アヴァンギャルドと美術館（司会：大平陽一）

◇総会

①会員の異動 ②理事会報告 ③決算報告と予算案の承認 ④選挙管理委員の選出 ⑤次期当番校

2. 『関西支部会報』2016/2017 年度 第 1 号発行  
2017 年 1 月 24 日

3. 春季研究発表会・総会  
2017 年 6 月 10 日 (土) 同志社大学

◇研究発表

青山忠申〔京都大学大学院〕『アヴァクム自伝』のアクセントに関する考察—自筆写本と 19 世紀写本の対照に基づいて (司会：岡本崇男)

中野悠希〔京都大学大学院〕ロシア語における斜格形と再帰代名詞との照応の統語的・意味的条件について (司会：服部文昭)

岡本崇男〔神戸市外国語大学〕もう一度人名 *Гюрги* について (司会：田中大)

◇総会

①会員の異動 ②理事会報告 ③次期運営委員会メンバーの決定 ④次期開催校

4. 『関西支部会報』2016/2017 年度 第 2 号発行  
2017 年 8 月 2 日

2017 年 10 月以降の支部長名・支部事務局連絡先

支部長：中村唯史

事務局：服部文昭

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

京都大学総合人間学部 服部研究室気付

hattori.fumiaki.4x@kyoto-u.ac.jp

■西日本支部

2017 年度総会・研究発表会

2017 年 7 月 8 日 於九州大学博多駅オフィス

◇研究発表

佐藤正則 転換した思想家たちにとってマルクス主義とは何だったのか？—ストルーヴェの場合

太田丈太郎 イリーナ・コジューヴニコワのアーカイブ

総会

1. 会員の異動について

2. 次期役員選出

3. 2016 年度活動報告

4. 2016 年度会計報告

2017 年 10 月以降の体制

支部長 西野常夫

事務局長 西野常夫

事務局住所 819-0395 福岡市西区元岡 744

九州大学大学院比較社会文化研究院 西野常夫研究室気付

日本ロシア文学会 第 67 回大会資料集  
2017 年 9 月 20 日発行  
発行者 日本ロシア文学会 望月哲男  
〒338-0825 埼玉県さいたま市桜区下大久保 255  
埼玉大学人文社会科学研究科野中進研究室内  
日本ロシア文学会事務局  
URL : <http://jaar.jpn.org/>